時空の羽

はく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時空の羽

【Ｎコード】
Ｎ６６８４Ｋ

【作者名】
はく

【あらすじ】
普通の大学生活を送っていた、海人。彼を待っていたのは想像の出来ない出来事に様々な世界。大切な恋人、桜を取り戻すために全てを懸けて挑む、海人。しかし、その先には数々な苦難が待ち受けていた。それを乗り越え、成長する海人。全ての存在は海人の手へと委ねられた。

大切な人、そして、世界を守る物語。全てを跳躍するその先には何が待っているのか?。現在から過去へ、過去から未来へ。読む人の

心へのメッセージをお楽しみ下さい。

プロローグ

言葉のチカラ。

人を想うチカラ。

鏡には全てが写り、見た人は自分の人生をかえりみる。

このままでいいのか。

足らないもの。

人は皆それを探す旅人となる。

終わりは始まりの終わり。

他人の言葉で左右されてしまう人々。

皆がそうなのか。

答えは出ない。

自分のチカラで進む人もいる。

だが、それは困難なこと。

願うもの、望むもの。

奪うもの、奪われるもの。

全てが点から始まり、点で終わる。
進まなければ何も始まらない。
この想いよ届け。

これはある長い長い人生の旅物語。
次元を超えた世界の旅物語でもあります。
どんな運命が待っているのか。
宿命?、偶然?、必然?、・・・それは誰にもわからない。
長編ファンタジー小説　時空の羽の連載のスタートです。
願わくは読者諸君におかれましては、声援を送って頂きたい。

第1話　＜第1部誕生編＞

う～ん、よく寝たなぁ。

枕元の時計を見てみる。

「もう、昼かぁ」

大学生の海人（かいと）には、時間に縛られることがない。

今は、昼からの講義に出席して、夜はアルバイト。

アルバイトは父も社会人になった時のためと、賛成してくれていた。

これが、海人の普通の日課であった。

2階から、リビングに降りて行くと、母が遅い朝食を作ってくれていた。

「おはよう」

母は俺に「よく寝るわね」という感じで声をかけてくる。

「ああ、おはよう」

頭をポリポリかきながら、海人は母にいつも通りの返事をしていた。

そして、今日が土曜日だったことを思い出す。

「あれ？、父さんは？」

母は肩をすくめてこう言った。

「最近は仕事が忙しいみたいで、休日出勤ですって。

本当はショッピングに付き合ってもらう予定だったのだけどね」

俺はまたかと思い、母に言った。

「父さんの会社って、最近ニュースによく出ているよね」

そう、父の会社は、最近開発して取った特許が画期的な発明とのことで、度々テレビで目にしていたのだ。

母はまた肩をすくめるように、早く食べなさいと俺に遅い朝食をすすめた。

そう言えば、空腹で目を覚ませたようなものである。

自分のことを忘れるとは情けない。

母のマネをするように肩をすくめ、遅い朝食を食べ始めた。

そして、母はいつもの伝言を俺に伝える。

「海人、たまには道場に顔を出しなさいよ」

俺の祖母、母にとっては義母のこと。

祖母は道場を持っていて、俺もそこに通っているからだ。

「わかったよ」

俺はその会話を軽く流して、朝食との格闘を再開した。

そのほのぼのとした、遅い朝食の空気を変えたのは一本の電話。

母は急いで電話を取りに行き、嬉しそうに、笑いながら相手と話しているみたいである。

女性の電話は長い。

たぶん、電話相手は女性だろう。

母の話し相手の電話が俺に変わった。

そして、母は嬉しそうに電話を俺に手渡した。

「海人、桜(さくら)ちゃんだよ」

第2話

そうだった。

今日は桜ちゃんと約束をしていたんだ。

一緒に映画を観る予定なのだ。

ふと、俺の脳裏に桜ちゃんと初めて会話をかわした時のことを思い出す。

それは、大学入学したての一年生の時。

講義を受ける俺の隣に、少し距離をあけて座る女の子の存在に気づいたことからだった。

講義が終わるといつもは皆退室していくのだが、その日は違った。

「あの～、海人君ですよね？」

俺は驚きと、胸が爆発しそうな音をたてているのを自分で聞いていた。

「・・・うん、君は？」

「あの、私、和泉桜です。覚えて・・・いませんよね？」

その言葉で、俺は自分の記憶にその姿を照らし合わせてみる。

しかし、その記憶はなかった。

俺が答えに困っていると、彼女の方から話しを切り出してくれた。

「中学校の同級生だったのですが、普通わかりませんよね」

中学校?、普通覚えている人なんかいるのかな。

話しは続く。

「海人君、女の子に人気があって、私も海人君のファンの一人でした」

俺が女の子に人気だって?。

男友達はたくさんいたが、女の子から話しかけられたことはなかった。

今や俺の心臓はドクドクと音をたてて、それが彼女に聞こえているのではないかと心配し、落ち着こうと必死だった。

そして、思ってもみなかった言葉が彼女の口から出て来る。

「よかったら、昼食、一緒に食べませんか?」

断れるはずがない。

これが、桜ちゃんとの出会いだった。

母がウインクして、電話に出ろと促している。

想い出にふけっている場合ではない。

「もしもし、海人君？。携帯電話が通じなかったから、お家に電話しちゃった」

電話をかわると、真っ先に透き通った声が聞こえてきた。

そうだった。

アルバイトが夜遅くまであるので、桜ちゃんに電話で起こしてもらう予定だったのである。

携帯電話は2階の俺の部屋に置いてきているので、通じるはずがない。

「おはよう・・・違った。こんにちは、桜ちゃん」

今日の予定の確認をしておかなくては。

「今日もいつもの場所でいいかい？」

答えはすぐにきた。

「うん、待ってる」

俺は時間と待ち合わせの場所を確認し、急いで食事を済ませ、出かける準備に追われることになった。

第3話

いつも待たせているので、今日は予定より、３０分早く待ち合わせ場所へと向かった。

俺は甘かった。

待ち合わせ場所は地下鉄の地下街の噴水の前と決めていたからだ。

桜ちゃんは既に来ている。

しかも、桜ちゃんを囲むように４人の男達がいる。

「お嬢さん、カラオケでも行かない？」

などと、男達の声が耳に入って来た。

桜ちゃんは困惑した様子で、小さな声で言っている。

「待ち合わせをしているんです」

俺は本当に甘かった。

桜ちゃんみたいな女の子が一人でいたら、ナンパされない方がおかしい。

急いで、桜ちゃんの手を握り、男達に言い返した。

「彼女、俺の連れなんだけど、何か用かい？」

男達が不満の声をあげる。

「兄ちゃん、横入りはいかんよ」

今日、何回目かの肩をすくめて男達に言った。

「本当なんだよね。桜ちゃん」

桜ちゃんは「うん」とうなずいて、俺の手を強く握り返してくる。

行こうと桜ちゃんを促して、その場を離れようとした時、一人の男が俺の腕をつかんで来た。

「待ちなよ」

その言葉と同時に俺は男の手を軽くひねった。

男は、円を描くに宙に舞い、背中から地面に落ち、何が起きたのかわからなかったようだ。

空気投げである。

合気道・・・。

俺は3歳の頃から、祖母に合気道を叩き込まれていたので、自然と体が反応したのだ。

勿論、手加減するのを忘れなかった。

余談だが、未だに祖母に手合いで勝ったことがない。

何しろ、祖母ときたら、合気道7段で多くの門下生をかかえている。

俺はそこで、師範代なのだが、祖母の強さときたら、妖怪かと思えるくらいだ。

周りがザワザワし始めている。

面倒に巻き込まれるのはゴメンだ。

目を点にした男達を尻目に俺は桜ちゃんの手を引っ張り、その場を後にした。

「ありがとう」

小さな声が桜ちゃんから聞こえてきた。

返事に困ってしまう。

何しろ、待ち合わせの場所をここにしたのは俺なのである。

「何言ってるんだよ。俺が待ち合わせの場所の選択を間違えたからだよ」

桜ちゃんは、小さな声でうなずき、更に俺の手を強く握ってきた。

「じゃあ、行こうか」

俺は桜ちゃんに合図をし、目当ての映画館へと向かうことにした。

第４話

映画館は、今、流行のシネマコンプレックスだ。

観たい映画は多くあるが、桜ちゃんと話し合っているので観る映画は決まっている。

あらかじめ、予約を入れておいたのは言うまでもない。

上映３０分前なので、丁度いい具合に映画を観ることが出来た。

映画の内容はと言うと。

幼き頃に離れ離れになった、母と子が感動の再会を果たすというものである。

桜ちゃんはというと、少し目をウルウルさせていて、今にも泣き出しそうだった。

そんな桜ちゃんを見て、俺は心から彼女を可愛いと思った。

映画を観終わると二人で、お気に入りの喫茶店に入るのがいつもなのである。

この店は、時間がゆっくりと流れるようなひと時が味わえるので、二人のお気に入りなのだ。

映画の話しを少しすると桜ちゃんから意外な言葉が出てきた。

「海人君、明日も一緒にいられる？」

俺は勿論とうなずくと次の言葉も更に意外な言葉だった。

「明日ね、海人君のお家に行きたいな。私、海人君のお母さんもお父さんも好きだからダメかな？」

断れるはずがない。

「大歓迎だけど、あんな、母さんや父さんがいいの？」

桜ちゃんがクスッと笑い答える。

「うん、優しいし面白いから。ゆっくり、お話ししたかったの」

俺はあるアイデアを思い浮かべ、携帯電話を手にする。

電話先は自宅だ。

電話には母が出た。

「もしもし、母さん。明日、桜ちゃんが家に来るけど、昼ご飯を一緒に食べたいんだ」

元気な声が帰ってきた。

「桜ちゃんかい？、大歓迎よ。母さん自慢の料理を作って待ってるって、桜ちゃんに伝えてね」

俺は桜ちゃんに指でＯ．Ｋとサインをして電話を切った。

そして、桜ちゃんに予定と時間を伝える。

「じゃあ、途中まで送って行くね」

桜ちゃんは嬉しそうに言葉を返してくれた。

「うん、明日楽しみ・・・楽しみにしててね」

『楽しみにしててね』、俺はあえて聞かなかったが、桜ちゃんは何か考えがあるみたいだ。

俺は桜ちゃんを地下鉄の改札口まで、見送り、明日の予定が決まった。

第5話

今日の母は喜びと悲しみの2面で俺を迎えた。

様子がわからないので聞いてみる。

「母さん、どうしたの？」

母は作り笑いの顔で俺にこう言った。

「お父さんがね、帰ってきてないのよ。昨夜、電話で泊まりになるって言ってきてね。最近、働きすぎで、ちょっと心配なのよ。でも、桜ちゃんが来てくれるからね。母さん頑張るわよ」

寂しさを忙しさでまぎらわせるように、母はバタバタと食事の準備を始める。

そして、申し訳なさそうに、こう付け加えた。

「あのね。お父さん、泊まりだから着替えとお弁当を届けたいの。それを海人に届けてもらおうと思ってね」

断る理由もないので、母の案を受け入れることにする。

「でも、桜ちゃんが来るけど、どうするの？」

またも、申し訳なさそうに付け加える。

「桜ちゃんが帰ってからでいいわよ」

「わかった」

俺はそう答え、桜ちゃんの到着と、母の料理が出来るのを待つことになった。

その桜ちゃんが来たのは、昼の1時間前だった。

少し早いかなと思ったが、桜ちゃんには何かの考えがあったようだ。

「私、食べるだけじゃなくて、海人君のお母さんの料理を手伝いたいなぁ」

桜ちゃんの考えそうなことである。

母は喜び、父のことは忘れてしまったかのように見える。

俺は一人待つ身となったが、母と桜ちゃんが楽しそうに料理をするのを見て心から微笑ましいと思った。

時計の針が12時を指すころに料理・・・昼食は出来上がった。

母と桜ちゃんの合作料理。

俺はワクワクしてテーブルの椅子に座る。

昼食会は楽しいものとなった。

母の料理はいつも食べ慣れている。

それに、桜ちゃんの料理が加わって、食卓に華が咲いたようだ。
母と桜ちゃんは、俺の子供の頃の話しをしながら食べていたので、特に母は食べた料理を吹き出しそうなのである。
楽しい食事会が終わりに近づくにつれ、俺はある記憶をよみがえらせる。
そうだ、父さんに着替えと弁当を届けなくてはいけない。
母は勘がいい、そして、気が利く。
そんな俺の心を読んだかのようだ。
「桜ちゃん、もし良かったら、海人にこの後付き合ってもらえないかしら？」
桜ちゃんは目をパチパチしながら、答える。
「お付き合いしていますよ、お母さん」
母は笑って、こう付け加える。
「あのね、ウチのお父さん、昨日から会社に泊まりこみで仕事しているのよ」
更に付け加える。
「もし良かったら、海人と一緒に着替えとお弁当を届けてくれると嬉しいのだけど」

母は手を合わせ、拝むように言った。

俺は予想外の母の言葉に少しビックリしてしまった。

桜ちゃんが、わざわざ父の会社に行く必要はない。

「はい、是非、お願いします。海人君のお父さんとお話してませんでしたから、私もお会いしたいと思　っていました」

俺の耳を疑うかのような返答が桜ちゃんの口から出て来た。

「じゃあ、お願いね」

母はウインクして、料理の後片付けをしようとしてた。

第6話

母と桜ちゃんが料理の後片付けをを済ませたのは2時３０分くらいだった。

本当は母一人でする予定だったのだが、桜ちゃんが私もと志願してくれていた。

「じゃあ、お二人には、3時のティータイムが終わったら、お父さんの会社に行ってもらおうかな」

母はこう付け加えることを忘れなかった。

「ゆっくりでいいのよ。桜ちゃんには、その間に海人の面白いエピソードをたくさん聞いてもらいたいから」

冗談ではない。

俺は自分の顔が赤くなっているのではないかと心配になる。

「冗談よ」

母は笑いながら、桜ちゃんにウインクしている。

絶対に言うつもりだ。

紅茶とクッキーを持ってきた母が、桜ちゃんにこう切り出した。

「あのね。海人が小学6年生の頃だけどね。高校生と喧嘩してきた

ことがあるのよ」

あの話かぁ。

俺も覚えている。

確かこうだ。

小学６年生の時、俺が友達と公園で野球をしていた時のこと。

そこに割り込むように入ってきた、高校生らしき男６人組。

俺たちを脅すように公園から、追い出そうとしていた。

「おらおら、ガギども、これからこの公園は俺たちが使うんだ。とっとと出て行きな」

小学生である弱者に対する態度。

俺は許せなく、怒りが体を支配してしまったようだ。

「今、俺たち使っているんだけど、何でどかないといけないの」

高校生たちは笑うように言う。

「ガキは大人の言うことを聞いていればいいんだよ」

一人の高校生が俺の胸の辺りをつかんだ。

「おら、どきな」

その瞬間である。

その男は大きな円を描いて宙を舞い、背中から地面に落ちた。

空気投げ。

他の男たちは予想外の出来事に何かわめいている。

そして、残り5人の男たちが俺につかみかかろうと手を伸ばしてきた。

結果は同じだった。

5人が次々に大きく宙を舞い、地面に叩きつけられていた。

そして、俺は自分の運の悪さを疑うことになる。

ちょうど、その時、警察官が自転車で巡回中で、その現場を目撃していたからだ。

男たちは上手く逃げ出していたが、俺には逃げる理由がないので、交番で連絡を受け飛んできた祖母に説教をされることになった。

祖母は拳で軽く俺の頭を叩き、「よくやった」と褒めてくれたのを今でも覚えている。

その話を母が桜ちゃんに話し終えた後に桜ちゃんはビックリして俺に話しかけてきた。

「海人君って、子供の頃から強かったんだね」

これが、俺の子供の頃の武勇伝である。

話の終わりと紅茶を飲み終えた母は、タイミングを計ったかのように切り出してきた。

「じゃあ、今回のお話しはここまでで、また次の時にもっと面白いお話しするからね」

「海人、桜ちゃん、悪いけど、お父さんの着替えとお弁当、お願いね」

そう言って、いつの間にか作っていた、弁当と着替えの入ったバッグを俺に差し出した。

「はいはい、わかりましたよ」

俺はバッグを受け取り、桜ちゃんに声をかける。

「じゃあ、桜ちゃん。悪いけど、一緒に行こうか」

桜ちゃんは「うん」とうなずき、

「海人君のお父さんとお話しするの楽しみ」

目を輝かせながら、椅子から立ち上がった。

第7話

父の会社は自宅から車で約４０分。

そう遠いというわけでもない。

こういった時に車があるのは本当に助かる。

車と言っても、俺がアルバイトして貯めて買った、中古の軽自動車である。

始め、大学入学の時に、父が車があった方が便利だろうと、車の購入までしてくれそうになったので、それは丁寧に断った。

大学の学費まで出してもらって、車まで買ってもらっては、ただのボンボンである。

俺は、中古のスクーターを買い、大学2年までそれで通った。

3年の始めの頃に資金が貯まり、今の中古の軽自動車をバイト代で購入した。

前のオーナーが女性とのことで、車内は綺麗で、中古とは思えないくらいである。

家の玄関を出て、桜ちゃんに「どうぞ」と車に乗ることを勧めた。

桜ちゃんは「お邪魔しまーす」と車の助手席に座った。

初めて乗るわけではないのだが、桜ちゃんの性格だろう。
明るく、気の利くのは、桜ちゃんの魅力の一つだ。
俺はトランクに父の着替えと弁当の入ったバッグを入れると運転席に乗り込んだ。
「じゃあ、桜ちゃん。行くよ」
そう言って、車のキーを回し、エンジンをかけた。
桜ちゃんは、「レッツ、ゴー！」・・・楽しそうである。
車を運転する間に俺は父の会社について、桜ちゃんに話そうと思っていた。
そう、桜ちゃんが父の会社に行くのは初めてなのである。
俺が言う前に桜ちゃんの方から、話しかけてきた。
「海人君のお父さんの会社って、最近ニュースに出てた会社でしょ？」
鋭い。
「大当たり、良くわかったね」
桜ちゃんは素早く切り返してきた。
「だって、会社名が『工藤研究所』で、海人君のお父さんもテレビ

に出てたから」

工藤健一郎、父の名前である。

そして、『工藤研究所』の所長を務めるのが父であった。

俺は何回か父の研究所に母に頼まれて行ったことがあるが、桜ちゃんは、初めてなのである。

桜ちゃんの質問は続く。

「海人君のお父さんの会社って、何を作っているの？」

俺は、わかりやすく、桜ちゃんに説明することにする。

「あのね、父さんの会社は、父さんが所長を務める会社で、民間から軍まで、色々な開発を依頼されて、研究したり、作ったりする会社なんだよ」

桜ちゃんは、好奇心を隠す様子もなく、次の質問にかかった。

「じゃあ、私が使っているものの中にも、海人君のお父さんの会社？研究所が作ったものがあるかもしれないのね？」

俺は、自分の知っている知識でわかりやすく、桜ちゃんの説明に答えた。

「製品そのものはないと思うけど、研究された技術が使われているのは、結構あるかもしれないね」

桜ちゃんは、何となく納得してくれたようだ。

その何気ない会話をしている時に会社へと続く道に異変があるのがわかった。

警察車両、パトカーを度々見かけたのだ。

そして、父の会社の前に着いた時、疑問は確信に変わる。

パトカーにまぎれて、自衛隊の車両を見つけたからだ。

これはおかしい。

俺の脳裏に、少なからず不安がよぎる。

桜ちゃんもこのただならない雰囲気に気付いたようで、不安な表情を浮かべている。

腕時計を見てみる。

午後5時を少し過ぎたようだ。

俺は、桜ちゃんに「ちょっと、待っててね」と言い残し、車を降り、会社の入口にある守衛所へ向かった。

第8話

父の会社に入るには、まず、この守衛所で入門許可証をもらわなければならない。

ここでも異変に気付いた。

守衛所の外に警察官が一人、立っていたからである。

俺は、その警察官に気付かないふりをして、いつものように守衛さんにガラス越しに話しかけた。

「こんにちは、工藤健一郎の息子の海人です。父に着替えと食事を持ってきたのですが、パスの発行をお願いします」

守衛さんは、少し緊張しているみたいで、いつもと異なった返事をしてきた。

「確認を取りますので、お待ち下さい」

５０歳くらいであろうか。

守衛さんは、急いで内線の電話を取り、誰かと話をしているようだ。

そして、俺の車を覗き込むように答えを告げる。

「お二人ですね。パスを発行しますので、会社入口の受付で、ＩＤカードを受け取って下さい」

「ありがとうございます」

守衛さんにパスを二枚もらい俺は車へと戻った。

車に戻り、桜ちゃんにパスを渡し、こう説明した。

「このパスを首からかけてね。それから、会社の受付でＩＤカードをもらうから、それで中に入れよ」

桜ちゃんは、今までの不安感を吐き出すように俺に話しかけてくる。

「海人君、お父さんの会社って、いつもこうなの？。警察の人もいるし、あの車は自衛隊でしょう？」

ある程度予想出来た疑問である。

「実は、俺も会社の近くで警察や自衛隊の車を見るのは、初めてなんだ」

自分でも少しの不安がある。

桜ちゃんは、目をパチパチさせて、話しを続ける。

「何かあったのかしら？、大丈夫なのかなぁ」

桜ちゃんの心配を取り除こうと、俺は桜ちゃんに説明した。

「パスをもらったからね。見たところ、それ以外は何もないから大丈夫だよ。車を会社の駐車場に停めるからね」

俺は会社の門の前へと車を近づける。

閉まっていた門は開いて、車を会社の駐車場へと車を停めた。

駐車場から少し歩くと、会社の入口が見えてきた。

ここは普段通りである。

安心して社内に入り、受付でＩＤカードをもらおうと、受付にいる女性に話しかけた。

「こんにちは、工藤健一郎の息子の海人です。父に着替えと食事を持ってきたので、ＩＤカードの発行をお願いします」

受付の女性は困惑の表情を浮かべている。

そして、内線電話をかけながら、「少々お待ち下さい」と俺たちに返事を返した。

どうやら、父と直接話しをしているようである。

もし、この会話を聞ける者がいるとすれば、こんな内容だ。

「所長、息子さんとお嬢さんがいらっしゃってますが、ＩＤカードの発行はどうしたらいいでしょうか？」

「ああ、海人と桜ちゃんだな。聞いているぞ。カードを発行して通したまえ」

「しかし、所長は現在、レベル５にいらっしゃってますが、どのレベルのカードを発行いたしましょう？」

「レベル５でかまわんよ」

「所長、しかし、レベル５のカードは一般の方に発行するのは危険だと思いますが」

「私がいいと言っておるのだ。早く、カードを発行したまえ。それとも、私にそこまで行けと命じるつもりなのか？」

「申し訳ございません。ただちに、レベル５のカードを発行いたします」

話しが終わったようである。

受付の女性は受話器を置き、俺たちにカードの発行とそれについての注意点を説明し始めた。

「このカードは、レベル５のＩＤカードになります。そして、このカードがあれば、会社内の全ての鍵となります」

そして、付け加えた。

「所長のいらっしゃる場所は、そのレベル５にあたりますので、そちらのエレベーターで地下５階の特殊開発ルームへお入り下さい」

不満そうに説明を終える。

「ありがとうございます」

俺は軽く会釈をして、２枚のＩＤカードを受け取り、１枚を桜ちゃんに渡した。

おかしい。

今までは、レベル４のカードをもらい、地下４階には行ったことがある。

しかし、地下５階の存在には気付かなかった。

疑問と不安が脳裏をかすめたが、桜ちゃんに心配はさせられない。

「じゃあ、行こうか」

桜ちゃんに話しかけ、地下へと続く、エレベーターへとその歩みを進めた。

第9話

エレベーターは入口近くにあるやつだ。

俺がカードリーダーにカードを通すと、エレベーターのドアがゆっくりと開いていく。

以前にも利用したことがある。

桜ちゃんと一緒に中に入ると以前との違いを見付けた。

上に6階を示すボタンと下に地下5階を示すボタンを見付けたからだ。

以前の時にはなかった地下5階のボタン。

俺がボタンを押そうとするとエレベーターの中に女性の声であろうアナウンスが流れてきた。

「このカードは、当研究所内全ての鍵となります。紛失なさらないよう、お気をつけ下さい」

アナウンスに少し驚いたが、俺は迷わず、地下5階のボタンを押した。

体に重力を感じる。

地下1階、地下2階へとランプが移って行く。

地下４階のランプが点灯した時に何か違うものを感じた。
長いのである。
地下４階から、地下５階へ降りる時間のことだ。
３分くらい経ったであろうか。
やっと、地下５階のランプが点灯し、エレベーターは止まり、ドアがゆっくりと開いた。
俺と桜ちゃんは目で「長かったね」という感じでお互いの表情を確認した。
地下５階は広かった。
明るいのだが、エレベーターを降りた先が見えないくらいだ。
そして、受付で聞いた「特殊開発ルーム」を探そうとしたら、桜ちゃんが案内板の様なものを見付け、話し切り出す。
「海人君、ここの案内板に書いてあるよ」
お手柄である。
俺は気付かなかった。
そして、地下５階の広さに再度驚くことになる。
地下５階には、大小５０くらいの部屋があるみたいだ。

この案内板に気付かなければ、迷子になっていたであろう。
そして、父のいる「特殊開発ルーム」は・・・あった。
突き当たりの一番大きな部屋らしい。
桜ちゃんに「行こう」と言って、父のいる部屋を目指した。
途中気付いたことがある。
どの部屋にも、カードリーダーがあり、何と言っても、音が一切聞こえないのだ。
完全な防音ルームなのかと思った。
それほど、重要なのであろう。
5分くらい歩いたくらいで、桜ちゃんが先に見付けた。
「海人君、あったよ。お父さんの「特殊開発ルーム」。本当に広いんだね。良く歩いたなぁ」
そう言って、少し笑っている。
今回は随分と時間がかかったものだ。
俺はドアの横のカードリーダーにカードを通す。
ドアは電動式みたいだ。

横にゆっくりと、スライドしながら開いた。
ドアが開き終わると喜声が飛んで来た。
「桜ちゃん、待っていたよ。海人はオマケな」
父である。
桜ちゃんの手を取り、はしゃしでいやがる。
俺は父の手を払いのけ、バッグを渡した。
「父さん、着替えと弁当が入っているからね」
父はニヤリと笑い。
「おう、確かに受け取ったぞ」
胸を反らし、笑いながら返答している。
所長であり、会社のトップの人間がこんなのでいいのかと何回思ったのやら。
俺はバッグを渡した安堵感と、父の元気な姿を見て、ほっとしている自分がいた。
そして、胸の中にしまっておいたことを父に聞いてみることにした。
「父さん、会社の周りに警察や自衛隊の車があるみたいだけど、何

かあったの？」

父は笑顔の中に、一瞬陰を見せたが、少し迷っているようだ。

そして、俺と桜ちゃんにこう説明を始める。

「海人、それに桜ちゃん。これは内緒の話しなのだが、２人なら安心かな」

絶対に他人に話すなという言葉を付け加えて。

いつの間にか、父の顔は真剣な顔になっている。

「その前に、ここではまずいな。２人ともついてきなさい」

よく見ると、部屋の中にもいくつかの部屋があるみたいで、いくつかのドアがあるのが見える。

父はそう言うと、部屋の奥へと進み出した。

第１０話（前書き）

日常が・・・

第１０話

「特殊開発ルーム」とやらは、相当に広い。

父の後をついて、５０ｍくらい進み、突き当たりを右に曲がった先にその部屋はあった。

この部屋だけは、今まで見た部屋と違うことがわかる。

それは、セキュリティとなる、カードシステムのことだ。

父はＩＤカードをカードリーダーに通すと、近くにある壁のくぼみのようなところに右手を入れた。

どうやら、静脈認証システムのようである。

ドアがスライドして開き終わると、父は俺たちにこう言った。

「海人に桜ちゃん、先に入りなさい。この部屋のドアは私が入ると、自動で閉まるようになっているのでね」

俺と桜ちゃんは少し緊張しながら、部屋の中へと入る。

そして、父が部屋に入り終わるとドアがゆっくりと閉じたのがわかる。

部屋の中は資料が山積にされたデスク、たぶん、父のであろう。

それと、応接用のソファーが向き合って並んでいるのが見てわかる。

父は俺と桜ちゃんに、ソファーに座るよう促し、自分は反対側のソファーに座った。

そして、信じられない話を俺と桜ちゃんに話し始めた。

「海人、桜ちゃん。この話しは絶対に他人に話してはいけないよ」

俺と桜ちゃんは「うん」と頷くと父は話を進めた。

「実は実験中にトラブルがあってね。それで、警察や自衛隊が動いているのだ。その実験は新たなテレビ、そう、『空間テレビ』と言っていい。空中に映像を映す実験をしていたのだ」

話しは更に進む。

「実験の最中に所員の一人が、入力データを間違えてしまってね。通常の１００００倍の電力を実験で使ってしまった」

父は俺の方を向いて話す。

「海人、以前、大きな停電があっただろう?。それは実験の影響によるものなのだ」

そう言えば、以前、大きな停電があったのを覚えている。

「じゃあ、あのテレビ放送は?」

俺は最近の父の会社のニュースについて聞いてみた。

父は何のためらいもなく話す。

「ああ、あれは実験を隠すためのダミー放送だよ」

桜ちゃんは、少し驚いたような表情で聞いている。

父がなぜ俺たちに重要な話をするのか、疑問を父に聞いてみた。

「父さん、こんな重要な話を俺たちに話していいの？」

父は目を一回閉じて、ゆっくりと開き、俺と桜ちゃんを見て話を進めた。

「もういいのだ。この実験は中止にして、データを全て破棄することにしたのでな」

そして、意外な言葉が俺と桜ちゃんの耳に入って来た。

「今、このフロアには私たちしかいない。実験装置は全て停止させてある。これから実験を見せてあげよう」

父はこう付け加えることを忘れなかった。

「危険なことは一切ないので、安心しなさい」

俺と桜ちゃんは目で意見を交わし、俺が父に「うん」と頷いた。

「では、ついてきたまえ」

父はそう言うと、ソファーから立ち上がり、入って来たドアへと歩

き出す。

俺と桜ちゃんも父の後について行く。

父がドアの前に立つと、ドアはゆっくりとスライドして開いた。

「さあ、行こう」

父は俺と桜ちゃんを呼び、部屋を出て行こうとしていた。

どうやら、出るのは自由のようだ。

部屋を出ると父は反対方向へ、今来た通路を反対に進み、左側へと方向を変え、ある部屋の前へたどり着く。

父の部屋と実験室とやらは、正反対の位置関係にあるらしい。

「では、同じように入るぞ」

父はそう言い、カードリーダーにカードを通し、くぼみに手を入れる。

ドアはゆっくりと、開き出した。

「先に入りなさい」

前と同じセキュリティのようだ。

俺と桜ちゃんは先に部屋に入り、後から父が入るとドアはゆっくりとスライドして閉まった。

その実験室は広い。

大学の体育館くらいの広さがある。

それを囲むように、色々な計器類、コンピューター、実験装置らしきものがある。

そして、部屋の中心に、ある物体らしき物が浮いているのを俺と桜ちゃんは見ることになる。

「海人、桜ちゃん。中心にあるものを見てごらん」

父は話し始めた。

第１０話（後書き）

・・・変わる。

第１１話（前書き）

日常が・・・

第１１話

色んな計器類の中心にその「物体は浮かんでいた」。

「今は近づいても安心なので、もっと近づいても大丈夫だ」

父は戸惑っている俺と桜ちゃんを促すように言った。

物体に近づいてみる。

その物体は、縦１ｍ、横６０ｃｍくらいの金属のように見えた。

鏡かと思ったが、それは誰の姿を映すこともなく宙に浮いている。

「海人、それは「時空の鏡」だ。私がそう名付けた」

後から父の声が聞こえる。

俺はその物体をもう少し観察しようと、色々な角度から、距離から見ていると父が説明を始めようとしているところだった。

「海人に桜ちゃん。「時空の鏡」を真横から見てごらん」

俺と桜ちゃんは鏡を挟むように、お互いを見つめるかたちで鏡を真横から見ることが出来た。

「？？？」

いや、違う。

「見えない」のだ。

真横から「時空の鏡」を見ると、それは姿を消した。

父が気付いたように説明を始める。

「その「時空の鏡」は私たちの次元には存在しないものなのだ。故に、真横から見るとその姿を消すことになる」

説明はつづく。

「私たちの世界は、縦、横、高さと三次元の世界として存在している。どうやら、それは違う次元のものだと思う」

父の話しは止まらない。

「これが実験で起こったことの副産物だ。次元が違うがゆえに、私たちはそれに干渉することは出来ない」

桜ちゃんは面白そうに、それの周りをくるくると回り、目を輝かせているが、俺には疑問が残る。

「父さん、こんな大事なものを俺たちに見せていいの？」

答えはすぐに来た。

「実はな、この実験中に人的トラブルが起こり、このフロアを一週間後に閉鎖することに決めたのだ。私はそれを、海人と桜ちゃんに見てもらおうと思ってな」

二度と目にすることは出来ないだろうという言葉を付け加えて。

俺は油断していた。

「時空の鏡」を見た驚きもあってのことだ。

今まで何も映さなかった「時空の鏡」が光を取り戻し、表面に波をうつ。

そして、鏡の中から男であろう「腕」が桜ちゃんを掴んだのを目撃したからだ。

桜ちゃんは「腕」につかまれ鏡の中へ入って行く。

「桜ちゃん！」

俺は桜ちゃんの手をつかもうとしたが、時既に遅し。

「海人・・・く・・ん」

桜ちゃんは俺の名前を呼びながら鏡の中へ吸い込まれた。

そして、「時空の鏡」は輝きを失い、元の姿へと戻っている。

父に叫んだ。

「父さん、どういうことだよ！」

父の顔に驚愕の色が浮かんでいるのが見れる。

「まさか向こうから干渉してくるとは・・・」

それから父に、事の経緯を暫く聞くことになった。

それは、父がこの実験をしている最中に現れた「時空の鏡」に所員が吸い込まれたこと。

そして、同じくこの「時空の鏡」に電力を加えたら、また所員が一人吸い込まれたこと。

それから実験を中止し、「時空の鏡」の調査を始め、今の結論に至ったこと。

「時空の鏡」は電力を、しかも、大電力を加えない限り、ただの物体として存在していること。

「時空の鏡」にはそれ以降・・・半年だが、何の変化もなかったこと。

俺にとって、そんなことはそうでもよかった。

「桜ちゃんはどうなるんだよ！」

父に問いただす。

「わからない」

先の二人も「時空の鏡」に吸い込まれ、戻って来ないことを俺に話した。

そして、俺にすまなそうに、意を決したように、はっきりと告げた。

「海人、すまない。桜ちゃんを助けに行こう」

第11話（後書き）

・・・非日常に変わった。

第１２話

暗闇の中、一人の大男、２ｍくらいはあろうか。

歓喜の声をあげている。

良く見ると、暖炉にはマキがくべられており、その灯りが周りを照らしている。

その男は、大きな笑い声ともとれる会話を一人でしていた。

「グハハハハッ、ついに戻ったぞ、我が力。これで、この古びた城に閉じ込められることもあるまい」

夜の目を持つ者が見れば、男が大きな部屋にいることがわかる。

そして、飾りなのであろうか。

壁には、大剣がかけられ、鎧らしきものも飾ってある。

男が指をパチリと鳴らすと、部屋に明かりが灯った。

ランプや電気のたぐいが見当たらない。

男の力によって、もたらされた明かりなのであろうか。

男の部屋は古城と呼ぶのにふさわしかった。

その古城に似つかわしくないもの。

部屋の暖炉のすぐ右側にあるガラスで出来たカプセルのようなもの。
それが、床に横たわり、淡い光を放っている。
その中には一人の女性が、眠っているのであろうか。
静かに横たわっている。
男はカプセルに近づくと、もう一度大きな笑い声をあげた。
「これぞ、我が力がよみがえった証。二度とあのような過ちは犯すまいぞ」
そう言い、もう一度指をパチリと鳴らした。
男の後ろに淡い8つの光が現れる。
その光の中には、人の形をなすもの、人の形をならぬものがいる。
男の後ろに現れたものたちは、声を合わせてこう言った。
「ご復活おめでとうございます。バルディ様」
その男、バルディは現れたものたちに声を返した。
「うむ、永く待たせたな。そなたたちには、また、ワシのために働いてもらおうぞ」
声を合わせて言葉が帰ってくる。

「お任せ下さい。バルディ様」

バルディは「うむ」と頷くと少し遠い目をした。

どうやら、何か考えを巡らせているようである。

そして、こう宣言した。

「皆の者、ワシが次元の主となる時がついに来た。まずはワシに仇なした者たちにワシの復活を知らしめてやろうぞ」

声が返ってくる。

「かしこまりました」

そう言うと、淡い光のものたちは一つずつ姿を消して行った。

バルディはまた一人になった。

そして、つぶやく。

「さて、どこから始めるとするかのう」

そう言うと、今までで一番大きな笑い声をあげた。

次にバルディが右手にしている杖を掲げると、地図と言っていいのだろうか。

天体図みたいなものがバルディの目前の空中に現れた。

「まずは、ここじゃな。ここには憎きあやつがおったのう」

悪意に満ちた声がバルディの口から発せられた。

第１３話

父が呼ぶ声が聞こえる。

「海人、大丈夫か？」

俺は桜ちゃんが「時空の鏡」に吸い込まれたことで、頭の中が真っ白になっていた。

父の何度目かの呼ぶ声で、やっと、我に返る。

「父さん、俺は桜ちゃんのためなら、何でもするよ」

父の悲痛な声が部屋に響く。

「ここに呼んだのは、私の完全なミスだ」

そして、付け加える。

「海人、確証はないが、「時空の鏡」に入ることは出来ると思う。ただ、中に入って何が待ち受けているのかは、私は・・・誰にもわからない」

俺に選択する道はない。

「父さん、俺は桜ちゃんを連れ戻すよ。だから、方法を教えて欲しい」

父の声は更に悲痛に聞こえた。

「この時空の鏡に大電力を加えることで、道は開かれる。だが、先にも言ったが、その先はどうなるのか全くわからない」

考える時間も惜しい。

「父さん、俺が時空の鏡に入るよ。桜ちゃんは俺にとって大切な人だから。必ず、連れ戻してみせる」

俺の決心を聞いた父の声が響く。

「わかった。海人、それでは時間がない。時空の鏡に大電力を加えてみよう。海人は時空の鏡の前に立っていてくれ」

付け加える。

「そして、時空の鏡が鏡のように姿を映すようになったら、時空の鏡に飛び込んでくれ」

気持ちは焦るばかりだ。

「父さん、いつでもいいから、早く頼むよ」

父は「うむ」と頷くと時空の鏡の周りにある、コンピューターやわけのわからない装置を起動させて行く。

何分経ったのだろう。

俺には永遠の時間に感じられた。

「海人、準備は出来た。本当にすまない。私は操作をしなければならないので、ここで待つ」

心配はない。

元々、一人で桜ちゃんを助けに行こうと思っていたからだ。

「海人、始めるぞ」

俺は「うん」と頷くと父が何かのボタンを押す。

大電力を加えるためだろう。

部屋の灯りが一瞬点滅したが、それ以外の異変はない。

そして、ついに時空の鏡は淡い光を放ち始め、俺の姿を映し始めた。

「父さん、行ってくる」

近所に出かけるみたいな言葉を残し、俺は時空の鏡に手を差し入れた。

鏡は差し入れた手を中心に波を打ち、波紋となってそれが広がる。

そして、意を決し、時空の鏡に飛び込んだ。

後ろで父の声が聞こえたような気がした。

「海人、頼んだぞ」

たぶん、父はそう言っていたのだろう。

残された父は、のどを搾り出すように言葉を発した。

「海人、桜ちゃん、本当にすまない。無事に戻って来てくれ」

それは祈りにも近い声であった。

第１４話

頭がくらくらする。

ここは?。

そうだ、俺は時空の鏡に入ったのだった。

ぼんやりしていた意識が元に戻っていくのがわかる。

「ここは・・・どこだ?」

自分が生きているのがわかり、自然と声になってしまった。

「ここは「次元の間」じゃよ。お若いの」

俺の頭の中に男・・・老人らしきと思える人物の声が聞こえる。

「ここはどこですか?、あなたは?」

自分のおかれた立場がわからず、俺の口からは疑問だけが出てくる。

俺は落ち着こうと、深く深呼吸をしてみる。

「ほう、若いのに落ち着いておるな」

頭の中に声が響く。

「先に来た2人は混乱し、暴れておったのじゃがな」

声の主を探そうと周りを見渡して見る。

そして、ここがとんでもない場所だと気づく。

ここ・・・次元の間には、数万・・・いや、数億、それ以上とも思える「鏡」が存在し、宙に浮いていたからだ。

そして、時空の鏡と違うのは「鏡」が厚みを持っていることだ。

声の主は、驚くべきことに俺の目の前にいた。

鼻と顎に白く長いヒゲを蓄えているので、やはり、老人らしい。

その老人も「鏡」と同じく、宙に浮いていた。

俺の戸惑いを感じたのか、老人から話しかけてきた。

「お若いの、ここは先に述べた通り、「次元の間」じゃ。そして、ワシはここの管理人・・・そう、ランスゥと呼ばれておる」

ランスゥは、俺の考えを読んだかのように、話を続ける。

「お前さん、名は何と言うのじゃ」

名乗って良いのか迷ったが、素直に自分の名前を名乗った。

「海人、藤木海人と言います」

ランスゥは、顎のヒゲを触りながら、話を続けた。

「海人か、良い名じゃ。どれ、ワシの目を見つめてみるがよい」
ここでは勝手が違う。
俺は、言われるままにランスゥの目を見つめた。
「ううっ」
ランスゥの目を見つめると俺の記憶、心が読まれているような気がする。
「ほう、珍しいの。素直な心じゃ。それに強い心を持っておるな」
ランスゥは直ぐに返答してくる。
「海人よ、お前さんの事情はわかった。探し人がおるようじゃな。それに協力しないでもない」
桜ちゃんのことを言っているのだろうか。
ランスゥは続けた。
「お前さんに協力してもらうために、ワシへの協力を手伝って欲しい」
何のことだろう。
「海人よ、ここ「次元の間」に最近、侵入者が現れるようになったのじゃ。お前さんの「世界」の人間も含めてな」

話しは続く。

「その中には、この「次元の間」を支配しようとする輩もいるのじゃ。それを阻止して欲しい」

俺は、とてつもない話に頭が少し混乱してきたのがわかる。

ランスゥの話しは更に続く。

「そこでじゃ。海人、お前さんに力を授けようと思う。この力はここにある「鏡」、様々な世界に通じておるのじゃが、そこに出入り出来る力なのじゃ」

ランスゥは、今までにない険しい顔をしながら、俺に話し続けた。

「もう一度、ワシの目を見るがよい」

ランスゥの両目には、赤い、そう、「鳥の羽」のようなものが浮かぶ。

自分の目が見えたら気づくだろう。

俺にもその「羽」が両目に浮かび上がったことを。

「これで完了じゃ」

ランスゥは、満足そうに言い放った。

「その前に、この2人をお前さんの世界に帰してやってくれ。今の

お前さんなら、それが出来るはずじゃ」

そうして、ランスゥは一枚の手鏡を俺に渡した。

手鏡を見ると、男女2人が鏡の中で混乱しているのがわかる。

「海人よ、意識を集中させるのじゃ。そうすれば、道は開かれる。この鏡でお前さんの世界に戻ることが出来る」

ランスゥは、俺が入って来た「時空の鏡」を指差した。

俺は、「時空の鏡」に意識を集中した。

俺の両目には、赤い羽が浮かび上がる。

鏡は俺を映し出し、そして、その中へ入った。

入りぎわにランスゥが、言葉を付け加えたのを忘れてはいけなかった。

「用が済んだら、また、この「次元の間」に戻ってくるのじゃ。忘れるでないぞ」

第１５話

光が体を包む感覚に襲われる。

意識は遠く、自分を遠くから見るような感覚であった。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「海人、大丈夫か？」

声が聞こえる。

父の声だ。

「父さん・・・」

父が俺の体を揺さぶるように話を続ける。

「海人、何があった？。時空の鏡に入れなかったのか？」

父の言っている意味がわからない。

「父さん、何のことだよ。時空の鏡に入ったよ。そして、ある人物と出会ったんだ」

父に疑問の表情が見てとれる。

「海人、今、時空の鏡に入ったと思ったら、はじき出されるように出てきたぞ」

「？？？」

一つのことが頭をよぎる。

どうやら、時空の鏡の中の次元の間では、時が止まっているか、その進行がもの凄く遅いらしい。

時間が惜しいので、父に詳しくは説明出来ない。

そうだ、あれがあった。

自分の右手を見てみる。

ランスゥから渡された手鏡だ。

「父さん、詳しく説明している時間はないけど、俺は時空の鏡に入り、ある人物と出会ったんだ。今、それを証明してみせるよ」

俺は右手に持つ手鏡に意識を集中させた。

両目には赤い羽が浮かび上がる。

手鏡が淡い光を放つ。

そして、左手を手鏡の中へと入れた。

誰かが手を握り返してきたのがわかる。

俺は思いっ切り、左手を手鏡から抜き出した。

現れたのは、一人の女性だ。

続いて、もう一度、左手を手鏡に入れた。

同じく、握られた感触を確かめてから、左手を手鏡から抜き出した。

今度は一人の男が現れた。

父が叫ぶように言葉を発した。

「伊東君、それに、高木君」

父に呼ばれた二人は父を見ると声を上げて叫ぶ。

「所長！！」

安心したように父が応える。

「二人とも、無事だったんだな。安心したよ。海人・・・良くやってくれた」

俺にとって、二人はどうでもいい存在だったが、父の喜ぶ顔を見るとホッとした。

「父さん、これから、また俺は時空の鏡に入って、桜ちゃんを連れ戻さなければならない。だから、また時空の鏡に入るよ」

父に少し困惑した表情が浮かぶ。

「海人、時空の鏡に加える電力を溜めるために、今からでは半日はかかってしまう。時間が欲しい」

俺にはその必要はない。

「父さん、俺は時空の鏡の中である人物に出会い、ある力をもらったんだ。だから、その必要はないよ」

1秒でも時間が惜しい。

「父さん、桜ちゃんを連れ戻してくるから」

父にそう告げ、俺は時空の鏡に意識を集中させた。

両目には赤い羽が浮かび上がる。

時空の鏡は、今や俺の姿を映し出している。

俺は何の迷いもなく、時空の鏡へと入った。

第16話

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「うわぁ」

思わず叫んでしまった。

俺の目の前にランスゥのヒゲだらけの顔があったからだ。

ランスゥがニヤリとして、口を開ける。

「失礼な奴じゃのう。ワシの顔を見て驚くとはな」

それはこちらのセリフだ。

「ランスゥさん・・・」

ランスゥが俺の言葉を途中で遮る。

「海人よ、ランスゥでいいぞ」

俺は頷き、気を取り直して話を進める。

「ランスゥ、渡された手鏡の2人は、元の、俺の世界に帰して来たよ」

ランスゥが頷く。

「よろしい。要領が良いようじゃな。そして、良くここに戻って来てくれた」

桜ちゃんを助けなければならない。

「ランスゥ、俺はある人、大切な人を取り戻すために戻って来たんだ」

全てを知っているかのように、ランスゥは話し始めた。

「知っておるぞ。それと、先に話した、この「次元の間」を狙う輩とお前さんの探す女の子は関係があると見ておる」

女の子って?。

本当にランスゥは全て知っているみたいだ。

俺は桜ちゃんが、鏡の男の腕にさらわれ、吸い込まれた経緯を話した。

ランスゥは少し優しげな声で俺に全てを話してくれた。

「海人よ。桜という女の子は、ワシがある場所に、鏡に封印していた男によりさらわれたのだと思う。その男こそが、この「次元の間」の支配を狙う輩なのじゃ」

話しは続く。

「どうやら、その男は自分の持つ、邪悪で、強力な力を復活させることに成功させたらしい。そして、野望である、この「次元の間」

の支配を企てようとしておる」

桜ちゃんとその男との接点が見付からないので、ランスゥに聞いてみる。

「女の子・・・桜ちゃんとその男に何の関係があるんだよ。それに、何故、桜ちゃんがその男にさらわれなければならないんだ」

一呼吸して、ランスゥは話を切り出して来た。

「海人、桜という女の子は、鏡・・・お前さんの世界では「時空の鏡」と呼ばれておるようじゃな。どうやら、「時空の鏡」を活性化させる力を持っておるようじゃ。故に、そやつによりさらわれてしまったものと思われる」

何だって?。

桜ちゃんが「時空の鏡」に関する力を持っている?。

俺の驚きを他所に、ランスゥの話しは続く。

「ここで提案、いや、頼みがある。全ての世界を守るためじゃ。あの男にこの「次元の間」を渡すことは出来ぬ。ワシはここの管理人である故に、ここを動くことが出来ぬ。海人よ、あの男の封印を頼まれて欲しい」

・・・・・・・・。

俺が?。

そんなことが出来るのか?。

桜ちゃんはどうなるんだ?。

ランスゥの狙いが理解出来ないので、ランスゥに問いただしてみる。

「ランスゥ、その・・・桜ちゃんをさらった男は、強力な力を持っているみたいだけど、俺にそんな力はない。それと、俺の目的は、桜ちゃんを助け出すことだけだ」

俺の心を読んでいたかのように、ランスゥは今度は顔を険しくして話し始めた。

「海人よ、この「次元の間」があの男に渡れば、お前さんの世界にも影響が出て来るのじゃぞ。しかも、あの男は邪悪な心の持ち主じゃ。それに対抗するには、清く、強い心の持ち主が必要じゃ。海人、お前さんはそれに最も適しておる。この無限にある世界の中でじゃ」

俺が?。

自分で自分がわからなくなって来た。

「桜ちゃんはどうなるんだ」

ランスゥは落ち着いている。

「桜という女の子は、力を持つが故、あの男の近くにいると判断しておる」

桜ちゃんを助け出せるのだろうか。

「ランスゥ、俺はその男に対抗する力がない。どうしたらいいんだ？」

「海人よ、ワシがお前さんにあの男に対抗する力を与えよう。それでどうじゃ」

俺に選ぶ道はない。

「わかった」

ランスゥはニンマリとしてこう付け加えた。

「忘れておった。あの男の名は「バルディ」と言うのじゃ」

第17話

「それでは始めるとするかの」

俺の目の前に一枚の鏡・・・古びた古城にでも飾ってありそうな鏡が宙を飛んで現れた。

宙に浮くその鏡は、この次元の間のどの鏡とも違い、曇り、時が止まっているかのようだ。

ランスゥがその鏡について説明しようとしていた。

「海人よ、この鏡には奴、バルディをワシが封じ込めた鏡なのじゃ」

話しは続く。

「バルディは、そう、海人、お前さんの世界で言う「魔法使い」、しかも、強大な力を持ち、邪悪な心を持っておる。そのバルディを再度鏡に閉じ込めなければ、いずれこの次元の間も奴に支配され、全ての世界に災い、不幸がもたらされることになる」

魔法使いだって?。

俺にはランスゥの言葉が信じられなかった。

その心を読んだかのように、ランスゥは話を続けた。

「海人よ、お前さんの強く清い心が必要じゃ。しかし、今のお前さんには、バルディには到底敵うまい」

当たり前だ。
魔法使い相手にどう戦えばいいのだ。
「そこで、海人、お前さんにいくつかの力を授けようと思う。知っておるぞ、合気道というのじゃな。それも役に立つじゃろう」
ランスゥが一度目を閉じて開いた時に一本の剣・・・長剣らしきものが現れた。
もはや、何が起ころうと驚くことはない。
よく見るとその長剣は、刃は所々が欠けており、表面には錆も見てとれる。
俺の心を読んだようにランスゥが言った。
「海人よ、その長剣を手に取ってみるがよい」
俺には選ぶ道はないので、素直に長剣を手にしてみた。
驚くことに、長剣は光を発し、その姿を変えようとしていた。
刃の欠けはなくなり、鋭さを蘇らせ、錆も消え、光を放つようだ。
ランスゥがニンマリとして話を始めた。
「海人よ、合格じゃ。どうやら、その剣に選ばれたようじゃな。その剣は持つ者の気によって、本来の力を発揮しするものじゃ。さす

れば、剣にも使い手を選ぶ権利があるのじゃ。海人、お前さんは選ばれたのじゃ」

俺は手にした長剣を改めて良く見てみる。

日本刀ではない。

どうやら、西洋の剣のようだ。

「おい！、若いの。良い清んだ気を持っておるな。しかも、こんなに強い気は初めてだぞ」

ん?。

ランスゥの声ではない。

どこからか声が聞こえる。

「ここだぞ、わからんのか。お前さんの手にしておるのは何じゃ」

???。

剣がしゃべった?。

「その通りじゃ」

ランスゥはまたニンマリとして話を始めた。

「海人よ、その剣は「青龍剣」じゃ。柄を見てみるとよい」

俺はランスゥの話のままに柄を見てみた。

驚くことに、柄には龍らしき姿が浮かびあがっているではないか。

青龍剣から声が聞こえる。

「わしは青龍剣と呼ばれておるが、本当の名がある。それを知った者にワシは力を貸すことにしておる」

本当の名前?。

「教えて下さい」

俺の口から自然と言葉が出た。

「よかろう、ワシの名は「ナナカミ」じゃ。よく覚えておくのじゃぞ」

ランスゥがナナカミについての説明をしようとしていた。

「ナナカミは、持つ者の気で力を発揮するのじゃが、選ばれたのは、海人、お前さんで二人目じゃ。わかっておる。剣が使えるかどうかじゃな。ナナカミには命と言っていいかの。それがあり、手にすれば、使い手の気の力で自然と動いてくれるのじゃ。故に、この剣をお前さんに授けたのじゃ」

頭がおかしくなりそうだ。

この次元の間の存在といい、しゃべる剣。

ランスゥは全てお見通しのようだ。

「海人よ、この次元の間では、気づいておるかもしれんが、時間はその歩みを止めておる。さすれば、詳しく説明しようぞ」

第１８話

ランスゥは俺を落ち着かせるかのように話し始めた。

「よいか、この次元の間は、お前さんが見た通り鏡を媒体として、ワシがその秩序を管理しておる。鏡を通して、あらゆる世界のバランスを保っておるのじゃ。故に、この次元の間を支配することは、全ての世界を支配することに通じる。それを狙っておるのが、バルディじゃ」

バルディ・・・桜ちゃんをさらった奴だ。

ランスゥがどこから取り出したのか、小さなペンダント、ロケットを手にしている。

「海人よ、このロケットを開けてみるといい」

ランスゥに言われ、俺はロケットを受け取り、開けてみた。

これは?。

開くと鏡らしきものはあるが、その姿を映すものはなかった。

そう、時空の鏡に似ている。

「海人、このロケットにバルディを閉じ込めて欲しい。このロケットに閉じ込めることが出来れば、バルディは二度とそこから逃げ出すことは出来まい」

俺に出来るのか？。

しかも、バルディを倒さないと桜ちゃんを救えないらしい。

選ぶ道はないのか？。

ランスゥが俺の迷いを断ち切ろうと優しく話しかけてきた。

「海人よ、バルディを倒すといっても、殺すことにはならぬ。奴は死なぬからな。それに、ナナカミは命を奪うことは出来ぬ。ナナカミで奴を倒せば、ある程度、そう、そのロケットに閉じ込める時間を稼ぐことが出来る。さすれば、お前さんの大切な人も取り戻すことが出来ようぞ」

まだ頭の整理がつかない。

「何を考えておるのじゃ。迷うことはないぞ」

ナナカミの声だ。

剣と会話をしている自分が未だに信じられない。

「ナナカミ、俺は桜ちゃんを取り戻したい。力を貸して欲しい」

剣・・・ナナカミから声が聞こえる。

「始めからそのつもりじゃ。バルディを野放しには出来ぬからな。お前さんの大切な人も待っているじゃろう。これは、ワシを操れる気を持つお前さん、海人にしか出来ぬ」

桜ちゃんを助けなければいけない。
俺に迷う暇はない。
「ナナカミ、力を貸して欲しい」
「おう！」
すぐに、ナナカミから返事がきた。
そこに、ランスゥが割り込んできた。
「二人とも、話しは済んだようじゃな。海人よ、恐れ迷うことはない。ナナカミ、そして、自分の力を信じるのじゃ」
そうだ。
バルディを倒し、桜ちゃんを助けないといけない。
「ランスゥ、ナナカミ。バルディは俺が倒し、桜ちゃんを助け出してみせる」
俺の心が決まった。
言葉が自然と俺の口から出て来た。
ランスゥが「よろしい」と頷くと古びた鏡を指した。
「海人よ、ナナカミと一緒にこの鏡に入るのじゃ。バルディと桜と言う女の子はそこにいるであろう」

ナナカミも声をかけてくれた。

「海人よ、ワシに任せておけ。お前さんとワシが組めば、バルディなど赤子の手をひねるより軽かろう」

ランスゥがここぞとばかりに言葉を発する。

「ではよいな。海人よ、この古びた鏡に意識を集中するのじゃ。要領は同じなので、簡単に出来ようぞ」

俺はその古びた鏡に意識を集中させた。

俺の両目に赤い羽が浮かぶ。

鏡は今や俺の姿を映し、表面に一瞬波紋が出来た。

俺は迷わず鏡の中へと入った。

ナナカミと一緒に。

第１９話

ここはどこだ？。

そうだ。

俺は、ナナカミと一緒にバルディのいる鏡へと入ったのだった。

暗い。

夜なのであろうか。

床は大理石で、壁は石組みによって出来ているみたいだ。

少しすると、暗さに目が慣れてきた。

「おい、明るくしてやろうか」

ナナカミの声だ。

見えると言っても、周りは暗く、歩き回るには難儀しそうだ。

「出来るのかい？」

ナナカミに聞いてみた。

「当たり前だ、それ！」

ナナカミがそう言うと、周りが明るくなった。

「???」

ナナカミ自身が光を放っている。

「助かったよ」

ナナカミにそう言うとナナカミから言葉が返ってきた。

「礼を言うのはまだ早いぞ。バルディを倒さなくてはならぬからな」

バルディ・・・。

桜ちゃんをさらった憎い奴だ。

行動をしなければいけない。

ナナカミのお陰で明るくなったので、自分のいる場所、周りが良くわかった。

高い天井。

壁にかかった絵画。

飾られた鎧や剣。

そう、まるで城のようだ。

もう少し良く見たら、暖炉らしきものがあるのがわかった。

これは?。

暖炉の火は消えているが、煙が白く立ち上り、薪の焼けた匂いがする。

バルディは近いのか?。

そして、この城と言っていいだろう。

城に似合わない物を見付けた。

ガラスで出来たようなカプセル・・・蓋は開いている。

誰かが入っていたのであろうか。

恐る恐る、カプセルのシートを触ってみる。

少し温かい。

どうやら、誰か入っていたようだ。

その時である。

「海人、気を付けろ!。何者かの気配を感じる」

ナナカミが小さな声でささやく。

「後ろだ!」

ナナカミの言った方向・・・そう、暖炉を振り返ってみた。

バルディなのか?。

一人の大男。

身長３ｍはあろうか。

いつの間にか、暖炉の前に現れている。

そして、男は悪意に満ちた声で俺達に言い放った。

「何だ、こやつは。子供ではないか。これがあの老いぼれの使いか！」

嘲笑とも聞き取れる声だ。

「お前がバルディか！」

その男に問いただす。

「無礼な！。お前ごとき子供がバルディ様の名前を口にするとは。俺の名はオーベルだ。覚えておくがいい。しかし、その必要はないか。お前は俺の手により、命を失うことになるからな」

俺とオーベルの間に戦慄が走る。

バルディの居場所は、オーベルに聞くしかなさそうだ。

ナナカミに声をかけた。

「ナナカミ、力を貸して欲しい。どうやら、オーベルからバルディの居場所を聞き出すしかなさそうだ」

「任せておけ。オーベルごときは赤子の手をひねるより易しかろうぞ」

ナナカミから自信に満ちた声が返ってきた。

俺とオーベルは戦闘態勢に入った。

第２０話

消えた?。

今まで俺の前にいた、オーベルが姿を消したのだ。

「海人、落ち着け、心を冷静にしてみろ」

ナナカミが声をかけてくる。

そうだ。

俺は剣・・・ナナカミでの戦いに慣れていない。

慣れていないのではない。

初めてなのだ。

ナナカミの言葉通り、心を冷静に集中してみる。

見えた。

オーベルの姿である。

オーベルはあの巨体に似合わず、高速で移動しながら、鞭のようなものを今まさに俺に攻撃しようとしていた。

危なかった。

間一髪で、俺はオーベルの攻撃をかわすことが出来た。

「ほう、若いのにやるではないか。俺の鞭をかわすとはな。小僧、褒めてやろうぞ」

オーベルの余裕のある言葉が聞こえてきた。

どうやら、口は達者のようだ。

ナナカミに声をかける。

「ナナカミ、行くぞ」

「任せておけ、奴ごとき小者、恐れるに足らん」

口では、ナナカミもオーベルに負けていないようだ。

俺は、オーベルめがけて、剣を振るった。

当たった?。

いや、かすっただけだ。

正確には、オーベルのその長髪を剣にかけただけだ。

オーベルから怒声が飛んでくる。

「小僧、俺様自慢の髪に手をかけるとは許さんぞ。次は本当にその命奪ってくれる」

剣と鞭の戦い。

リーチの差で剣の方が不利に思える。

ナナカミから声が飛んできた。

「海人、ぼやぼやするな。考えることはない。お前さんの気をワシに込め、奴めがけて振ってみろ」

俺は、集中しナナカミに気を集めた。

ナナカミが淡く光を放ち始めた。

俺はオーベルめがけて、剣を振った。

危なかった。

オーベルの鞭が目前に迫っていたからだ。

俺の放った気が、オーベルの鞭を断ち切り、そのまま、オーベルを直撃した。

「ううっ」

オーベルから苦痛の声が聞こえた。

「貴様ごとき小僧に俺様の鞭を断たれるとは。小僧、名乗れ、その名前覚えてくれようぞ」

「海人だ、藤木海人だ」

オーベルは傷を負いながらも笑みを浮かべている。

「海人か、覚えてくれようぞ。しかし、バルディ様がお前ごとき小僧の相手をするはずがない。ここで、その命もらっておく」

オーベルがそう宣言すると、オーベルの前に一人の大男が現れた。

そう、空中に突如現れたのだ。

大男といっても、オーベルよりはその背丈は低い。

２ｍくらいだろうか。

その男が言葉を発した。

「貴様がランスゥの代理だな。オーベル、ここはひとまず退け」

オーベルが不満の声をあげる。

「バルディ様、こんな小僧、私めがここでその命奪ってご覧いたします」

バルディが怒声をあげる。

「愚か者!、こやつは、あのランスゥの代理だ。今回は甘く見たお前の負けだ」

そう言って、バルディが指を鳴らすと二人は姿を消した。

「待て、バルディ！」

俺の声は、バルディに届かなかった。

「海人君・・・」

空耳だろうか。

桜ちゃんの声を聞いたような気がした。

ナナカミが声をかけてくる。

「仕方ないの、ひとまず、次元の間に戻ろう。もうここには何者の気配もない」

バルディを逃してしまった。

桜ちゃんのことを聞けなかった。

悔しいが、ここはナナカミの言う通りにするしかなさそうだ。

俺は、入って来た鏡の前に立ち、意識を集中させた。

鏡が俺の姿を映し始めた。

「桜ちゃん、必ず助け出してみせる」

そう宣言し、鏡の中へと入った。

第21話

悔しさでいっぱいだった。

バルディどころか、バルディの手下のオーベルまで逃してしまった。

桜ちゃんを助けることが出来なかった。

次元の間に戻り、ランスゥに事の経緯を話した。

「ランスゥ、バルディを逃してしまった。敵はバルディだけではないのか？」

ランスゥは、その長いヒゲを触り、少し考えているようだ。

答えはこうだ。

「海人、バルディは己の力を取り戻しただけではなく、己の配下のものまで復活させたようじゃ。ワシが知っておる限り、奴の配下は8人じゃ。その中には、人のカタチをなすもの、人のカタチをなさぬものもおる」

敵はバルディ一人だけではなかったのか。

「ランスゥ、俺はどうしたらいいんだ？」

答えはすぐに返って来た。

「バルディが鏡を使い別の世界へ移動すると、ここの鏡が曇るので

な。奴の居場所を探すのは容易い。じゃが、移動した先にバルディがおるとは限らん。今回のように、奴の配下のものがおる可能性があるからじゃ」

ナナカミが声をかけてくれた。

「心配するな。ワシがおれば、バルディやその配下のものなぞ恐れるに足らん」

今はナナカミの言葉が心強かった。

バルディだけではなく、バルディの配下、ランスゥの言葉が正しければ8人。

桜ちゃんを早く助けなければならない。

気持ちが焦る一方だ。

「海人よ、落ち着くのじゃ」

ランスゥとナナカミが同時に声をかけてくれた。

そして、ランスゥが話し始めた。

「海人よ、バルディの移動先は既にわかっておる。じゃが、先に述べた通り、バルディ本人か、奴の配下なのか区別がつかん」

そう言うと、一枚の鏡が宙を飛び、俺の前へと移動してくる。

その鏡は、ランスゥの言う通り、曇り、鏡の枠には様々な動物が描

かれている。

驚くべきは、鏡に映っている人達、人と言っていいのだろうか?。

鏡の中で動くそれらは、体は人間のようだが、頭が全て動物・・・

ライオンや犬の姿をしていたからだ。

動揺を隠せず、ランスゥに聞いてみる。

「ランスゥ、この鏡にいるのは人間なのか?、それとも、動物なのか?」

穏やかなランスゥの答えが返ってくる。

「海人、この世界の住人は、頭はお前さんの世界の動物じゃが、お前さんと同じ人間じゃ。心配は必要ないぞ。バルディはここに移動しておる。しかも、この世界の住人は、争いというものを知らぬ。平和な世界じゃ」

少しの安心と緊張が俺を支配する。

ランスゥは宣言した。

「海人、ナナカミと一緒に、この世界に移動するのじゃ」

不安が過ぎるが、俺に選ぶ道はない。

鏡に意識を集中させた。

俺の両目には、赤い羽が浮かぶ。

鏡は俺の姿を映し出す。

俺は、ナナカミと一緒に鏡へと入った。

第２２話

体が痛い。

ぼんやりとした意識が回復すると、自分の置かれた状況がわかった。

両足には鎖に球状のおもりが付けられ、周りを見ると、そう、牢の中のようだ。

なぜ、俺はこんな状況に置かれているのか、暫くわからなかった。

「おい、海人。大丈夫か？」

この声は？。

そうだ。

ナナカミの声だ。

俺はバルディを追って、鏡の中へと入ったのだった。

鏡を出たところを何者かに襲われ、今の状況に至っているのだった。

どうやら、バルディに先を読まれたらしい。

しかし、俺を襲ったのは誰だ。

牢の前に一人の男らしき姿が見える。

頭はヒョウで、体は俺と同じ人間だ。

俺を襲ったのは、バルディではないのか？。

ランスゥは、この世界の住人は争いを知らない平和な世界だと言っていた。

しかし、俺の両足には鎖とおもり、そして、牢屋の中に閉じ込められている。

ナナカミに相談してみる。

「ナナカミ、ここはどこなんだ？」

ナナカミの答えは簡単だった。

「鏡を出たところをこの獣人たちに襲われたのじゃ。不意打ちというのじゃな」

なぜ、争いを知らぬ、この世界の住人が俺を襲ったのか疑問が残る。

しかも、鏡を出たところをタイミングよく不意打ちするとは。

その時である。

不遜な声が聞こえて来た。

「惨めなものだな小僧。こんな小僧にしてやられたとは、未だに信じられん」

聞き覚えがある。
オーベルの声だ。
気が付くと、牢屋の前で俺を見て笑っている。
「海人、脱出するぞ」
ナナカミの声が聞こえて来た。
しかし、ナナカミは今、俺の手にはない。
俺の手の届かないところに立てかけられている。
ナナカミの判断は早かった。
「海人、ワシを呼べ。急ぐのじゃ」
ナナカミの言う通り、ナナカミを心で読んでみた。
ナナカミは俺の手に納まり、淡く光を放っている。
驚いたのは、オーベルだ。
「小僧、やる気か！。その状況で何が出来る」
「海人、この邪魔な鎖はワシが断ち切る。その後に、オーベルの相手をしてやろう」
ナナカミがそう言うと、体が自然と動いた。

両足に付けられた鎖は、見事な断面を見せ、俺を解放した。

「海人、このまま牢屋を破り、オーベルを倒すのじゃ」

ナナカミの言葉に従い、牢屋を破った。

鉄で出来ていたであろう鎖、それに牢屋をナナカミは簡単に断ち切ってみせた。

次の相手は、オーベルである。

牢屋を守っていた獣人は、驚き、逃げて行った。

オーベルの顔が引きつっている。

「オーベル、今度は逃がさないぞ」

俺は、オーベルに向かって宣戦布告した。

第２３話

オーベルが逃げる?。

ナナカミがささやく。

「奴の武器のムチは、この牢屋では役に立たぬからな。したたかな奴じゃ。海人、仕方ない。追うぞ」

逃げるオーベルを追った。

この牢屋は地下にあったらしい。

階段を上がり、そのあとを追った。

そして、突然、眩しい光に包まれた。

外に出たのはわかる。

しかし、この歓声は?。

どうやら、競技場らしきところに出たみたいだ。

俺は、オーベルと対面し、競技場の中心に立つことになった。

歓声の主は・・・獣人たちである。

犬頭、虎頭、鶏頭・・・様々な獣人たちの顔が見てわかる。

オーベルが宣言した。

「みなのもの、ショータイムだ。これから、この小僧を叩きのめしてやろうぞ」

歓声がいっそう大きくなった。

「海人、この前は油断しておった。ランスゥの代理なら手加減はいらんな」

オーベルが戦闘態勢に入った。

「海人、行くぞ」

ナナカミが声をかけてくれた。

俺は、今の自分の立っている場所。

そして、なぜ、こんな場所でオーベルと対決しなければならないのか考え、呆然としていたからだ。

ナナカミの声はありがたかった。

答えはオーベルを倒してからでいい。

俺の耳に周りの歓声は聞こえなくなった。

心が静かに集中していく。

「オーベル、今回は逃がさない。桜ちゃんの居場所を教えてもらう

ぞ」

そう言って、俺とオーベルは、お互いを睨み合った。

戦いの始まりである。

オーベルは距離をおいている。

この間合いは、オーベルのムチの距離である。

「海人、飛び込むぞ」

ナナカミの声と同時に、俺はオーベルに向かい突進した。

オーベルのムチが飛んで来る。

その神速ともいえる、オーベルのムチの動きが見えた。

それだけではない。

体が軽い。

神速のムチを余裕をもってかわすことが出来た。

一つ、二つ、三つ・・・六つとムチをかわした。

オーベルの顔には焦りの色が見える。

その隙を突いた。

ナナカミに集中して気を溜めた。
そして、俺の一振りがオーベルに当たる。
オーベルは、驚きの表情をしながら、仰向けに倒れた。
倒れたオーベルに駆け寄った。
「オーベル、桜ちゃんはどこだ?。バルディはどこだ?」
答えはそっけないものだった。
「小僧、たとえ知っていても、貴様に教えることなどない。貴様ごとき、バルディ様にかかれば指一本とも必要とはしまい」
「海人、このままではらちがあかん。ひとまず、ロケットにオーベルを封じ、次元の間に戻ろう」
ナナカミの考えに従うのが正解のようだ。
俺は、ロケットを開き、鏡に意識を集中させる。
ロケットの鏡は淡く光を放ち、姿を映し始めた。
そして、オーベルを掴み鏡の中へと放り込んだ。
オーベルは、俺の手の平より小さいロケットに吸い込まれた。
「ナナカミ、次元の間に戻ろう」

そう言った時、俺の前に一人？の獣人が声をかけて来た。

「お待ち下さい」

その獣人の頭は、ライオンの頭であった。

第２４話

開口一番にライオン頭の男が言葉を発した。

「申し訳ありませんでした。異世界のお方」

そうして、俺の前で片膝をついた。

周りの獣人達もそれに習う。

状況が今一つわからないので、思い切って、ライオン頭の男に話を聞く事にした。

「これはどういうことなのですか?。貴方達の世界に争いはないと聞きましたが」

ライオン頭の男は、自分を「ガイツ」と名乗った。

ガイツが手を挙げる。

誰かを呼んでいるようだ。

獣人達が列をあける。

白い猫の顔をした獣人が、ガイツと同じように俺の前で片膝をついた。

そして、自分を「マーニャ」と名乗った。

ガイツが話しを始める。

「異世界のお方。このマーニャは私の娘で、この国の神官を務めております。このマーニャが、バルディ、オーベルと名乗る男達に術をかけられたようで、石になってしまったのです。その2人が言うには、指示する鏡の前で待ち、そこから現れる者を捕らえろとの指示でした。マーニャは、この世界のバランス、私達には聞こえない、大気の話しが聞ける神官です。それ故、私達は、先の2人に逆らうことは出来ませんでした」

マーニャが話しを始めた。

「大変失礼を致しました。そして、ありがとうございました」

声を聞く限り、女性のようである。

「お名前をお聞きしてよろしいでしょうか？」

一瞬、戸惑ったが、素直に名乗った。

「海人、藤木海人と言います」

「海人様・・・」

「海人でいいよ」

「はい、海人さん。本当にありがとうございました。これでこの世界も元の平和な世界に戻るでしょう」

俺は重大なことを忘れていた。

桜ちゃんのことを聞かなければならない。

「あの・・・バルディ、オーベルと一緒に女の子はいませんでしたか？」

「マーニャは石にされていたので、事情を知りません。私がお答えいたします」

ガイツから話しが聞けそうだ。

「バルディ、オーベルと名乗る者達は、まず私の自由を奪い、マーニャを石に変えました。マーニャを元に戻して欲しくば、貴方を捕らえろと指示し、私を自由にしました。２人です。私が見る限りでは、バルディとオーベルの２人だけです。他の者にも聞いてみましょう」

ガイツは立ち上がり、吼えるような声で話し始めた。

「皆の者、マーニャを石に変えた、バルディとオーベルの他に女の子を見た者はおらぬか」

周りがザワザワしたが、誰も答えを発しなかった。

「海人さん、やはり、バルディとオーベルの２人だけのようです」

俺はガイツの言葉を聞き、今までの緊張が解けてしまい、頭が少しくらくらした。

「海人、気を抜くではない」

ナナカミがささやいた。

そうだ。

ここで止まっては、桜ちゃんを助け出せない。

「ひとまず、次元の間に戻ろう」

仕方ない。

ナナカミの考えが正しいようだ。

俺は、事の経緯を話し、鏡の前に案内してもらうことにした。

「そうでしたか。力になれなくて申し訳ありませぬ。貴方が出て来た鏡には、私とマーニャでご案内します」

そう言うと、マーニャも立ち上がり、「どうぞ」と声をかけてくれた。

俺はガイツとマーニャのあとを追うことになる。

その鏡は、歩いて２０分くらいであろうか。

螺旋の階段を登り、その頂上にあった。

「ガイツさん、マーニャさん。それではお元気で」

俺は２人に別れを告げ、鏡に意識を集中させた。

鏡は俺の姿を映し出していく。

そして、鏡の中へと入った。

第２４話（後書き）

『短編小説』もよろしくね♪。

第２５話

次元の間だ。

俺とナナカミは帰って来た。

ランスゥにいち早く話しかけた。

「ランスゥ、バルディはいなかった。その代わりに、バルディの配下を１人、ロケットに閉じ込めたよ」

ランスゥが手を差し伸べて来る。

「海人、ロケットをワシに見せてくれぬか」

俺は、オーベルを閉じ込めたロケットをランスゥに渡した。

ランスゥは、俺から受け取り、それを開いた。

「おおっ、こ奴はバルディの配下のオーベルじゃな。知っておるぞ。どうやら、バルディの復活と共に奴の配下も復活したらしい。海人、少し面倒なことになってきそうじゃ」

配下だって?。

バルディの行方もつかめないのに、配下がいるのか?。

「ランスゥ、バルディの配下と人数はわからないのか?」

ランスゥに確認してみる。

ランスゥは、少し困った顔をしたが、全てを俺に話してくれた。

「海人、よいか。ワシが知る限り、バルディの配下は8人じゃ。このオーベルはその中で一番弱いと言ってよい。バルディの配下は、バルディを絶対の主と崇めておる。これは難儀なことじゃ」

敵はバルディ1人ではなかったのか。

オーベルを閉じ込めたので、バルディの配下は残り7人。

バルディと直接対決して、早く桜ちゃんを助け出す方法はないのだろうか。

ランスゥに今までの疑問をぶつけてみる。

「ランスゥ、バルディの移動先がわかると言ったけど、バルディの配下にあたらず、直接、バルディを倒すことは出来ないのだろうか」

ランスゥの答えは簡単だった。

「海人、すまん。バルディが移動する先は、鏡を見ればわかる。しかし、そこにバルディがいるという保証は出来ぬ」

何か忘れていた。

そうだ。

オーベルにバルディの居場所を聞けば良い。

「ランスゥ、閉じ込めたオーベルに、バルディの居場所は聞けないのかい？」

ランスゥがすまなそうに答える。

「海人、このロケットに閉じ込めた者との連絡は出来ぬ。出来るとすれば、ここから出さなくてはならぬ。それに、オーベルが口を割るはずがあるまい。すまんが、この次元の間でオーベルを開放することは危険すぎる。ここは全てにつながっておるからな」

こうなったら、進むしか俺に道はない。

「ランスゥ、次はどこへ行けば良い？」

ランスゥが、言葉を発したら、1枚の鏡が宙を飛んで来た。

「海人、バルディはここに移動しておる。鏡が曇っておるからな」

鏡を見てみる。

鏡の枠は、様々な惑星によって囲まれている。

ランスゥが、鏡について説明しようとしていた。

「この鏡の世界は、魔法使い。そう、バルディの誕生した世界じゃ。よって、この世界の住人は大小あれ、皆、魔法が使える。バルディのことじゃ。よからぬことを考えておるに違いない。海人、罠があるかもしれぬ。気をつけるのじゃ」

迷っている暇はない。

ナナカミに声をかけた。

「ナナカミ、行こう。バルディを倒し、桜ちゃんを助け出そう」

「任せておけ」

ナナカミから声が返って来た。

「ランスゥ、行ってくるよ。今度こそ、バルディを倒してみせる」

そのランスゥから、意外な声が返って来た。

「海人よ、この鏡の世界・・・いや、実際に行ってみるとよい。不思議な世界じゃからな」

？？？。

「ランスゥ、不安になることを言わないでくれよ」

「すまん、ここで、バルディについても知ることが出来ると思う。もう一つは内緒じゃ」

ランスゥは、何か隠しているようだ。

「もういいよ。俺に選ぶ道はないからね。ナナカミ、行くぞ」

そう言って、鏡に意識を集中させた。

曇っていた鏡は、俺の姿を映し出す。

俺とナナカミは、鏡の中へと入って行った。

第２５話（後書き）

『短編小説』と長編恋愛小説『四季に読む歌』もよろしくね♪。

第２６話

鏡に入る前に、ナナカミが声をかけてくれたのを忘れてはいけなかった。

「海人、鏡の出入りが一番危険じゃ。この前のようにならぬようにな」

そう、この前はオーベルの罠にはまり、鏡を出たところを不意打ちされた。

今回は集中を解かず、鏡の中へ入った。

しかし、ランスゥの隠していたことが気になる。

鏡を抜けた。

この前のように不意打ちをされることはなかった。

なぜなら、鏡を出た所には誰もいなかったからである。

ここは？。

長椅子が多くあり、ステンドガラスがある。

そうだ。

俺の世界では、教会と言っていいだろう。

他の世界にも信仰があるのだろうか。

ここでじっとしているわけにもいかない。

ナナカミに一声かけて、ここを出ることにした。

扉は両開きである。

開けると眩しい光が入って来た。

どうやら、昼に近い時間らしい。

扉を開け、数段階段を降りると、そこは道路のようであった。

しかし、俺の世界のそれとは事情が違った。

道路に自動車はなく、そのかわりに馬車が道路の主役だったからである。

俺の前には、道を挟んで店らしきものがあるが、実際は店かどうかもわからない。

馬車に混じり、人が歩いているのがわかった。

どうしたらいいものか。

ナナカミが声をかけてくれた。

「海人、人と馬車が多く進む方へワシたちも行こう。たぶん、それがこの国？の中心となるじゃろう」

年の功である。
俺はナナカミの声に従うことにした。
道路を見て、流れの多い方向を探ってみる。
俺の左手の方に流れが多くあるようだ。
「ナナカミ、左手の方向に進んでみるよ」
ナナカミに一声かけて左手の道路へと進んだ。
俺を見る人々が色んな表情を見せる。
警戒する者。
好奇心で目を輝かせる者。
いったい何なんだ！。
その時である。
木材を多く載せた荷馬車のロープが切れた。
危ない！。
木材の落下点には、一人の少女がいた。
２０本くらいの木材は、今まさに少女の上に落下しようとしている。

そして、不思議なことが起こった。

落下した木材は、空中で止まり、母親であろう女性が少女を助け出し俺にこう言った。

「ありがとうございます。どうやら、他の国の方ですね。しかも、大きな力をお持ちです」

何のことかわからなかった。

ナナカミに聞いてみる。

「ナナカミ、今、力を使ったかい？」

ナナカミの答えは簡単だった。

「ワシがか？。そんな余裕はなかったぞ。しかも、あの大量の木材を止めるのはワシだけでは無理じゃ」

木材は既に地面に落ちている。

少女を助けた母親らしき人が俺に話しかけて来た。

大きな事故なので周りはザワザワしている。

「このたびは本当にありがとうございました。この国は初めてですか？。それでしたら、お城で職業登録をなさって下さい。お城はこの道を真っ直ぐに行ったところにあります。白い建物なので、ひと目でわかると思いますよ。あなた様なら、きっと、大魔法使い間違

いありません」

女性はそう言うと、娘を連れて立ち去った。

ん?。

職業登録?。

俺はこの国で働かなければならないのか。

バルディのことを聞けなかった。

どうやら、城に行って事の真相を聞くしかなさそうだ。

少しの不安と疑問が残ったが、俺は教えられた通り、城へ向かった。

第27話

女性の言う城、そう、真っ白な城は歩いて15分くらいのところにあった。

正確に言えば、城門の前である。

城門の前には、槍を手にして、守衛が門を挟むように立っている。

何をしたらいいのかわからないので、門の右手にいる守衛に話しかけた。

「あの、すみません。この国は初めてで何もわからないのですが、職業登録をした方が良いと聞きました。何かご存知ですか？」

守衛は、少し緊張を解いて、俺の問いに答えてくれた。

「ああ、旅人さんですね。ようこそ、ジャガの国へ。職業登録でしたら、あの建物の中へお入り下さい。」

そう言って、左手の2階建てであろう。

少し大きめな建物を指差した。

「ありがとうございます」

何と言っていいのかわからなかったので、とりあえず、礼を述べた。

そして、その建物へと歩みを進めた。

建物のドアをノックしてみる。

「どうぞ」

若者ではない。

年配の女性らしき声が返って来た。

俺はドアを開けて中へ入った。

中は広かった。

壁には棚があり、そのほとんどを書物が埋めている。

そして、部屋の中央に少し長めのテーブルと椅子があった。

テーブルには、真ん中に声の主であろう老婆、その老婆を挟んで老人が座っていた。

その老婆が説明を始めようとしていた。

「旅人さん、ようこそ、ジャガの国へ。これから話すことは、この国に滞在、住む者の決まりで、皆さん、何かの職業に就いているのですよ。まずは、名前をお聞きしましょうかね。その前に、私の前の椅子へどうぞ」

俺は、勧められた椅子に座り、断る理由もないので名乗った。

「海人、藤木海人と言います」

老婆がニッコリして話を進めた。

「海人さんですね。この国では珍しい名前で、良い響きです。では、これから、職業決めの段取りを説明します。海人さん、このテーブルの上に水晶玉があります。そこに手を当てるだけで、結構です」

確かに、テーブルの上には水晶玉がある。

決まりか知らないが、何故、俺がそんなことをしなくてはならないんだ。

バルディを見付け、桜ちゃんを助け出さなければならない。

ナナカミがそんな俺の焦りを見抜いたかのように、小声でささやく。

「海人、ここは、郷に入れば郷に従えじゃ。目的はその後でもよかろう」

・・・・・・。

仕方ない。

ナナカミにまで言われては、そうするしかないか。

俺は意を決し、水晶玉に手を当てた。

水晶玉が淡く光り、その中にある映像を作ろうとしていた。

その映像とは、始めは白い煙みたいであったが、徐々にあるカタチ

を形成した。

これは？。

俺の驚きを他所に老人たちの驚きは更に大きいものだった。

「これは珍しい。何ということじゃ。こんなことがあるのか」

真ん中の老婆が驚きを口にする。

そう言って、周りの本棚の本を探し始めた。

そして、1冊の本を見付け、取り出す。

「パン屋じゃ」

言ったのは、右側の老人である。

「何をボケとるんじゃ、爺さん。白の魔法使いじゃ。これは初めて見るぞ」

ん？。

白の魔法使い？。

俺のことか？。

老婆が驚きを隠さず、俺に話しかけて来た。

「海人さん、あなたの職業は魔法使いです。しかも、白の魔法使い。

白の魔法使いが現れたのは、私の記憶によれば、３００年も以前のこと。海人さん、どうか、この国の国王の話を聞いて下さいませ」

俺が白の魔法使い？。

何のことかわからない。

老人たちは、立ち上がって、俺が国王に面会するのを期待しているのがわかる。

仕方ない。

俺は、椅子から立ち上がった。

ナナカミではないが、郷に入れば郷に従えだ。

第２８話

忙しかった。

老人たちは俺を急かすかのように城門へと導いたからだ。

老婆が城門の守衛の１人に話しかけると門が大きく開いた。

大きい。

門は、幅５ｍ、高さは１０ｍはありそうだ。

門が開くと更に俺を急かした。

そんなに大事なことなのであろうか。

城の中に入る。

広い！。

俺にそんな感慨をあたえる暇もなく老人たちに急かされた。

まず、中庭を通り過ぎた。

その中庭の中心には大きな噴水があり、周りの緑と溶け込んでいた。

ここまで、１０分くらいかかっただろうか。

更に通路を進み、階段を上がった。

３０分くらいかかったであろうか。
王の間と呼ばれる部屋に到着したのは。
そして、この国がいかに栄えているのかがわかった。
通路から王の間に至るまで、数々の絵画や装飾品がそれを彩っていたからだ。
王の間を見渡して見る。
両脇を兵士に囲まれ、その奥に立派な椅子、そう、玉座があり、左に男性、右に女性が座っていた。
老人たちが「早く、早く」と急かし、俺を玉座の前まで引き寄せる。
老人たちは、片膝をついた。
そして、話し始めた。
「国王陛下、ついに現れましたぞ。白の魔法使いでございます。さ
さ、海人さん、こちらへ」
強引な老人たちに戸惑ったが、国王と言われる人物の前まで進んだ。
「海人さん、お待ちしておりました」
その声は若かった。

近づいたので、その面影が良く見える。

若い。

国王とその隣の女性は、まだ俺の目から見て３０代くらいに見える。

「私はこの国の国王、サイラ。そして、妻であり、王妃のディードです」

そう言うと、ディードと呼ばれた女性が言葉を発した。

「海人さん、はじめまして。ディードと申します。そのご様子では、この老人たちに強引に連れられて来たようですね」

ディードは「クスッ」と笑い、俺に話しかけた。

当たり前である。

俺はこの世界に来たばかりで、この国についても何も知らない。

いきなり、職業に就けと言われ、老人たちに引っ張られてここにいるのだから。

「あの・・・サイラさんにディードさん。信じてもらえるかわからないけど、俺はこの国の人間でもないし、この世界の人間でもありません。正直、少し戸惑っています」

俺の言葉に落ち着いた答えが返って来る。

「わかっていますよ、海人さん。白の魔法使いは、皆この世界の住

人ではありませんでしたからね」

サイラは全てを知っているようだ。

「海人さん、この話しは少し長くなります。お時間をいただきたい。これは、この世界だけではなく、あなたの世界にも影響をあたえることになると思いますからね」

どうやら、ここは腰をすえて話をする必要がありそうだ。

「サイラさん、俺にも話さないといけないことがあります。俺がこの世界に来た理由と、今、起こっていることです」

「お互いを知る必要がありそうですね」

ディードが間に入る。

「海人、何か理由がありそうだ。ここで情報を仕入れることにしよう。お前さんが白の魔法使いという謎もあるからな」

ナナカミがささやく。

仕方ない。

ナナカミの案を受け入れ、ことの経緯を話し、桜ちゃんとバルディの情報を仕入れることに腹を決めた。

第２９話

「まず、私の話をお聞き下さい」

サイラが話を始めようとしていた。

「私の国、いや、私たちの世界には伝説があります。それは『黒の魔法使い現る時、白の魔法使い現る』です」

黒の魔法使い？。

俺にある考えが浮かんだ。

黒の魔法使いは、バルディではないのか？。

「サイラさん、もしかして、黒の魔法使いの名はバルディではありませんか」

ストレートすぎたかとも思った。

しかし、サイラの答えはもっとストレートだった。

「はい、そうです」

もしかして、バルディを見付けることが出来るかもしれない。

「海人さん、ご存知のようですね。バルディは私たちの世界に３００年前に現れ、そして、白の魔法使いに封印された伝説の魔法使いです」

サイラの話にディードが割って入ってくる。

「海人さん、この国の職業選択の水晶玉に手を当てましたよね。伝説によれば、バルディはその儀式で『黒の魔法使い』と告げられたようです」

サイラが話を受けつぐ。

「私たちの先祖は、黒の魔法使いが何なのか知りませんでした。ただ一つ言えるのは、強大な魔法使いであったということだけです」

３００年?。

バルディは３００年もの長い間を生きていたのか?。

ランスゥがバルディを殺すことが出来ないと言っていたのを思い出した。

???。

そうだ。

ここは、バルディの生まれた世界。

少しでも情報が欲しい。

「サイラさん、俺はバルディに大切な人をさらわれ、バルディを倒し、封印するという使命があります。詳しくは話せませんが、今、俺のやることは、少しでも早くバルディを倒し、封印することです」

「わかっていますよ。それが白の魔法使いである海人さんの運命ですからね」

サイラは全てを知っているようだ。

「サイラさん、俺はバルディを追ってこの世界に来ました。バルディはこの世界に戻っているはずです」

声の主はディードである。

「海人さん、バルディの気配は私が感じ取りました。しかし、その気配は1日経つと消えてしまったのです。どうやら、バルディはこの世界にある、バルディの居城で何かを持ち出したようです。そして、それはバルディの邪悪な野望を達成させるために必要なものだと思います。お願いします。海人さん、バルディを止めて下さい」

ディードの悲痛な願いが俺の心に届いた。

「先にも言いましたが、俺はバルディを倒し、大切な人を助け出すという使命があります。バルディについて知っていることがあったら教えて下さい。白の魔法使いのこと。バルディのやろうとしている計画のこともです」

サイラである。

「海人さん、あなたは白の魔法使いです。バルディを倒すことの出来るのは、あなたしかいません。バルディはこの世界に自分の居城を構えていました。きっと、そこで何かを持ち出したのでしょう。私たちには、バルディの結界があるため行けませんが、白の魔法使

いである、あなたならバルディの居城へ入ることが出来ると思います。そこにバルディに関する何かが見付かるかもしれません。場所はわかっています。これをお持ち下さい」

そう言い、サイラが指をパチリと鳴らすと球状の光り、いや、俺の世界にある地球儀みたいなものが宙を飛んで俺の前へ現れた。

「どうぞ、手にお取り下さい。これが地図になります。黒く光る点がバルディの居城です」

サイラのすすめるままに、それに手を触れてみた。

???。

俺が触るとそれは俺の手の中へと吸い込まれた。

「海人さん、心で唱えて下さい。地図が出て来ることを」

ディードが説明してくれた。

言われたままに、心で地図を思い浮かべてみた。

驚いたことに地図が俺の手の平から浮かび上がった。

「海人、これは長い旅になりそうじゃ。ここで準備を整えてから出発しよう」

ナナカミがささやく。

俺はナナカミの案を受け入れることにした。

バルディを倒し、桜ちゃんを助け出すということを心に強く秘めて。

第３０話

「人さらーい！」

「誘拐魔ー！」

ポフッ。

男と言っていいのだろうか、それとも人間と言っていいのだろうか。

その音は男の顔面に枕が命中した音であった。

投げたのは、男を批判していた女性。

今は天蓋のベッドに座り込んで、男を睨みつけている。

２人の関係は?。

女性の容姿は、まだ完全な女性になりきっていない、可愛さの残った美しい女性だ。

男の方は・・・カメ?。

まるまると太り、首と頭の境目がわからない。

身長は１．５ｍくらいであろうか、低めである。

何とか人間に見える。

「お嬢様、それに着替えて頂かないと私めが旦那様に叱責されてしまいます。どうかお召しになって下さい」

女性からは反発の声が返って来た。

「何で私がこんなのを着なければならないのよ。それに私を早く元の世界に帰しなさい。カメ男」

「カメ男ではありませんぞ。私にも一応名前があります。ガスキュールとお呼び下さい」

「何がガスキュールよ!。カメ男のくせに偉そうな名前ね。誘拐魔には『カメオ』で十分よ」

女性の更に強い反発の声が帰って来た。

男の反応は・・・。

「・・・、お〜い、おい、おい。お、お嬢様、お願いします。どうかお着替えを」

泣き出してしまった。

「もう、泣かないでよ。大人でしょ。それにこの服は私には大き過ぎるわ」

ガスキュールが涙を拭きながら必死に答える。

「お嬢様、この服は、神獣ムーシファの毛により編まれております。さすれば、着た人のサイズに変化するという優れものでございます」

「う～ん、泣かれたんじゃねぇ」

女性は少し迷っているようである。

「じゃあ、着替えるから、部屋から出て行ってちょうだい」

女性の心は決まったようだ。

「かしこまりました。まことにありがとうございます」

そう言うと、ガスキュールは部屋から出て行った。

「仕方ないなぁ。これを糸口に元の世界に戻るチャンスもあるかもしれないから・・・」

そう言いながら、女性は着替え始めた。

15分くらい経ったであろうか。

「カメオ、入っていいわよ」

女性がガスキュールを部屋に招きいれた。

「おお、何とお美しい。これで私も旦那様に叱責されることもありますまい。お嬢様、ありがとうございました」

確かに女性は美しい。

それが本人の資質なのか、服によるものかどちらであろう。

服は見事な淡いブルーのドレスであった。
その時である。
ドアがノックされた。
ドアが開く。
ドアからは、２m近い大男が入って来た。
「この人さらい、誘拐魔！」
ポフッ。
今日、２度目であろう。
女性の投げた枕が入って来た男の顔面に命中した。
「ああ、バルディ様、何ということでしょう」
ガスキュールはうろたえている。
「まあ、よい」
バルディと呼ばれた男は軽く受け流した。
そして、一言、言い放った。
「おお、見事じゃ。予想以上の美しさじゃぞ、桜姫」

第３１話

ついにバルディの居城に侵入する時が来た。

バルディに関することは見つかるのだろうか。

「サイラさん、バルディの居場所はわかったけど、どうやって行けばいいのですか？」

簡単な質問だが、それが一番問題である。

サイラは「ああっ」という顔つきでこう言った。

「そうでした。白の魔法使いでも海人さんは異世界の方。魔法の使い方をご存知ないのですね。それではここで少し練習して行きましょう。バルディの城には飛んでいかなくてはなりません。そして、バルディの城の結界を破れるのは、白の魔法使いである海人さんにしか出来ませんからね」

魔法をどうやって使えというのだろう。

「では、私が説明しますね」

ディードが魔法の使い方を教えてくれるらしい。

「まず、飛び方ですが、自分の体が軽い。そう、羽のように軽いと心の中で思い浮かべて下さい。そして、飛べるんだという意識をはっきりと持って下さい。では、どうぞ」

いきなり言われても困ったが、ディードの説明通りにしてみる。

俺は軽い・・・羽のように軽い・・・。

飛べるんだ！。

？？？。

驚いたことに、俺の体が３ｍくらいの高さに浮いた。

「そうです。では、移動してみて下さい。移動は移動する方向に行けると思うだけで大丈夫ですよ」

ディードの声が下から聞こえる。

右手の方向に移動を試みる。

！！！。

出来た。

こんなに簡単なのか。

左にも、そして、円を描くように上下左右と自由自在だ。

「さすがです」

ディードである。

俺は着地し、他の魔法について聞いてみることにした。

「ディードさん、バルディの城に行くのはいいけど、バルディに対抗出来る魔法はないのですか？」

サイラが答えてくれた。

「それは私の専門ですので、私がお答えいたします。海人さん、魔法使いにはレベルがあります。最高位は海人さん、あなたの白の魔法使い。そして、黒の魔法使いのバルディです。海人さん、黒の魔法使いであるバルディに会えば、白の魔法使いである海人さんの能力は自然と出て来るはずです。それと、私たちには白の魔法使いがどんな魔法を使うのかわかりません。何しろ、３００年以前のことですからね。既に伝説になっています」

「海人、ワシがおる。それだけで十分じゃ」

ナナカミの声である。

「おや、そちらの方は？」

サイラが興味深げに聞いて来る。

「これは俺の相棒のナナカミです。しゃべる変わった剣ですよ」

「海人、もっと他の良い言い方はないのか！」

ナナカミが抗議の声をあげる。

「はじめまして、ナナカミさん。強い力をお持ちですね」

ディードである。

「ふむ、このご夫人は人が出来ておるな。海人とは比べものにならんわ」

ナナカミはどこか嬉しげである。

「おふた方、時を急ぐゆえ、ワシらはすぐに旅立たなければならぬ。海人、行くぞ」

ナナカミの言う通りだ。

バルディを倒し、桜ちゃんを連れ戻さなければならない。

「それでは、この城の屋上から飛ばれるのがいいと思います」

ディードがそう言って席を立った。

サイラも同じである。

「どうぞ」

俺はサイラとディードの後につき、城の屋上へと向かった。

第３２話

城の屋上へは玉座の左にある扉から、螺旋状の階段を１０分くらい上がったところにあった。

眩しい。

まだ陽は落ちていないようである。

「海人さん、ここから飛び立ち下さい。陽が落ちる前までにはバルディの城に着けるでしょう」

サイラが声をかけてくれたが、イマイチ自信がない。

上手く飛べるのだろうか。

「海人、行くぞ。迷う時間はない」

ナナカミに言われるまでもない。

俺は自分に気合を入れた。

それは合気道の手合いの前のように静かで強い心だ。

「では、サイラさん、ディードさん。行って来ます」

俺は友達の家にでも遊びに行くみたいな返事を２人に返した。

仕方が無い。

他に言いようがなかったのだから。

体が宙に浮く。

地図を出して、バルディの城へと飛び立った。

風が心地良い。

空を飛ぶことがこんなに気持ちの良いことだったとは。

進行方向を修正しながら、バルディの城へと進んだ。

1時間くらいであろうか。

俺の世界の人間が俺の飛ぶスピードを知ったら、驚くことだろう。

何しろ、それは俺の世界のどの飛行機よりも速く飛んだからだ。

陽が少し傾きかけていた。

空は黄金色へと変わっている。

あれか?。

島の中央に城らしきものが見えてくる。

城の真上に停止した。

ナナカミが声をかけて来たからである。

「海人、わかるか？。城を覆うように結界みたいな力を感じる」
俺にもわかった。
バルディの城は強い結界によって守られている。
「破れるか？」
ナナカミの問いに問い返した。
「ナナカミ、わからない。一緒に・・・力を貸して欲しい」
「任せておけ。海人、もう少し、自信を持つのじゃ」
そうだ。
ここで止まっては、何も始まらない。
ナナカミに気を送る。
？？？。
今までと違った力が俺の中から出て来るのを感じる。
いけそうだ。
「ナナカミ、行くぞ！」
その声と同時にナナカミを思いっきり振った。

力が、今までと違う力がナナカミから放出された。

結界は？。

黒い稲光を一瞬見せ、それは消えた。

どうやら成功したらしい。

「海人、やったな。しかし、気を抜くでないぞ。ここからが本番じゃ」

そうだ。

俺は緊張を解かぬようにして、バルディの城へと降り立った。

そこは城の中庭であるみたいであった。

第３３話

これがバルディの居城なのであろうか。

俺の降りた中庭には、中心に水を噴出している噴水があり、その周りには緑・・美しい花々がある。

驚くことに蝶まで舞っているではないか。

これは・・・幻覚なのか？。

「海人、どうやらここには誰もいないようじゃ。それと、この城自体が生きているかのような力を感じる」

ナナカミに言われるまでもなく、それは俺にもわかった。

誰の気配を感じることが出来ない。

それと、城が生命を持っているような不思議な感覚。

これがバルディの魔力によるものなのだろうか。

３００年の時を経ても衰えぬ力。

それが未だに機能しているのだろうか。

城の奥へと進んでみる。

やはりそうだ。

この城は主がいない間もその姿を変えることはなかった。
通路や壁に飾られた絵画や装飾品には、埃を被った様子が微塵も見られない。
勿論、地面である通路にもだ。
「ナナカミ、バルディはここから何かを持ち出したと聞いたけど、一体何だろう？」
「ワシにはわからん。この城がワシの感覚を狂わせているようじゃ。しかし、わざわざバルディが持ち出したのだから、奴にとっては相当なものじゃろう」
俺と同じく、ナナカミにもわからないようだ。
通路を進み、大きな広間へと出た。
どうやら、ここがバルディの玉座らしい。
部屋の奥に大きめの立派な椅子が見えたからだ。
その時である。
玉座の前に半透明な画像が浮かび上がった。
そして、驚くべきものを見ることになった。
画像は俺の世界にあるテレビのようで、ある人物と・・・！！！。

ついに見つけた。

「どうやら、お前がワシの宿敵となるようじゃな。ランスゥの代理ということで、薄々、感じておったぞ」

声の主はバルディである。

「海人君！」

そして、桜ちゃんだ。

今は淡いブルーのドレスを着ている。

「無駄足じゃったな。そこにはもう何もあるまい。桜姫はワシがもらった。お前がワシに会うことは叶うまい。何故なら、その前にワシの配下の者たちによって、その命を失うことになるからな」

「海人君、私は大丈夫！。私、海人君を信じて待っているから・・・」

「もうよかろう。さらばじゃ」

バルディがそう言うと画像は消えた。

桜ちゃんは無事だった。

やはり、バルディに連れ去られていたんだ。

しかし、「桜姫」とは？。

ここで止まってはダメだ。

ひとまず、サイラさんとディードさんに事情を話した方が良さそうだ。

「ナナカミ、ここではバルディに関することは何もわからないと思う。ひとまず、引き返そう」

「そうじゃな。それが賢明のようじゃ。海人、焦るでないぞ」

ナナカミは逸る俺の心を静めてくれているようだ。

オレは急いで城の中庭に戻った。

体が宙に浮く。

城がだんだん小さくなる。

俺はガイツの国を目指した。

光のような速さで。

第３４話

ガイツの国へ戻って来た。

急いで王の間へと向かう。

「サイラさん、ディードさん。バルディの城には行った。正確には入った。しかし、手掛かりになるようなものは見付からなかった。しかも、バルディに俺の正体を・・・先読みされていたみたいだった。そして・・・俺の大切な人、桜ちゃんはバルディと共にいた」

「そうでしたか。バルディは強大な魔法使いです。しかも、策略に長けています。海人さん、一度、出直した方が良さそうですね。あなたには多くの仲間がいるはずです。どうか、焦らないで下さい」

サイラの言葉が今の俺には温かかった。

ナナカミに相談してみる。

「ナナカミ、一度、次元の間に戻ろうと思う。ランスゥにこのことを話す必要がありそうだ」

「そうじゃな。ここにバルディがいないのであれば、ここにいる必要もあるまい。次元の間に戻ろうぞ」

行動が決まった。

「サイラさん、ディードさん。短い間でしたが、お世話になりました。急ぎなので俺たちは出直します」

ディードが優しく話しかけてくれた。

「海人さん、焦らないで下さいね。白の魔法使いのあなたの使命は大きい・・・。他の誰にも想像出来ないような試練が待っているかもしれません。しかし、私は、いえ、私たちは信じていますよ。海人さんがバルディを倒すことを」

「では、失礼します」

俺はそう言い、城を後に鏡のある教会へ向かうことにした。

「お待ち下さい」

ディードが俺に話しかけて来た。

「おまじないを・・・何かの役に立つと思います。私にさせて下さい」

そう言うと、ディードの左手から、一筋の光が俺の左手に当たり、何かが吸い込まれたようだ。

「終わりました。それでは少しのお別れです」

???。

「ありがとうございます」

何と言っていいのかわからなかったので、そんな言葉が俺の口から出た。

教会の鏡へと向かう。

途中、今までと違い、変化があるのがわかった。

俺に会う人皆が俺に頭を下げ、目をキラキラさせているからだ。

どうやら、俺が白の魔法使いだということは国中に広まっているらしい。

先を急ぐ。

見付けた。

あの教会だ。

教会の前には多くの人が俺を待っているかのようにそれを囲んでいた。

これでは中に入れない。

「すいません、通して下さい」

そう言うと、人並みが割れるように道が出来た。

教会の扉を開ける。

・・・・・・・・・・。

良かった。

教会の中に人はいないようだ。

鏡・・・・・・。

あった！。

俺は鏡に意識を集中させる。

両目には赤い羽が浮かび上がる。

鏡は輝きを取り戻し俺を映した。

俺は何の迷いもなく、鏡の中へ入った。

第３５話

「海人に桜ちゃん。そろそろ、お父さんに会えた時間かな。お父さんは桜ちゃんの大ファンだから、飛び上がって喜んでいるかもしれないわね」

海人と桜を送り出した後、こんな独り言を言う、幸せに恵まれた女性の声が静かに響く。

「電話しちゃおうかな。う～ん、でも、２人とも子供じゃないからね」

そう言いながら、テレビの電源を入れる。

「今日の特集は、可愛い子猫ちゃんたちで～す」

番組の女性司会者が３匹の子猫を紹介しようとしていた。

それぞれの子猫たちは、飼い主の膝の上で興味深そうな目を見せている。

「まあ、可愛い。ウチも猫ちゃんを飼おうかしら」

海人の母はそんな声をあげている。

司会者がそれぞれの子猫の紹介をしようとしていた。

「今日は皆、男の子ですね。まず、こちらの子が、ゴン太ちゃん、チョコちゃん、ミー太ちゃん、そして、にゃん太ちゃん」

紹介されると会場から「可愛い」の声が聞こえてきた。

「本当に可愛いわぁ。海人もお父さんも猫好きだから、真剣に考えておこうかしら」

楽しそうである。

その時、電話が鳴った。

「もう、いいところなのに！」

少し不満の声をあげながらも電話に出る。

「はい、藤木でございます」

「あれ？、ラーメン屋さんじゃないのですか？」

？？？。

どうやら、間違い電話のようである。

「いいえ、藤木ですが」

「すみません、失礼しました」

そう言うと電話が切れた。

「もう！、失礼しちゃうわね。あっ、猫ちゃんの番組が終わっちゃったじゃないのよ」

そう言って、番組を2～3回変えてみる。

「面白そうな番組がないわね。お風呂の準備をしておこうかしら。海人も帰って来ることだし」

そう言いながら、風呂場へ向かった。

同時刻。

「海人！」

「所長・・・」

「海人のやつめ。戻って来たと思ったら、また鏡の中へ入ってしまったぞ。どういうことなんだ」

「2人とも今日は帰りたまえ」

所長と呼ばれた男が部下であろう2人に声をかけた。

「所長、私はここの研究員です。最後まで見届けたいと思います」

「私もです」

所長と呼ばれた男・・・海人の父は肩を落とし、2人にこう言った。

「仕方が無い。責任は取れんぞ。好きにしたまえ」

部下の2人はその言葉を聞くと喜びの声をあげる。

「では、私たちは装置のチェックと監視をします」

そう言って、装置に向かった。

「2人とも、戻ったばかりだ。無理はしないでくれよ」

「はい！」

「はい！」

海人の父は肩をすくめ、鏡の様子を、2人の帰りを待つことになった。

第３６話

次元の間に戻って来た。

ことの経緯をランスゥに話さなければ。

？？？。

ランスゥがいない。

無限に広がる次元の間を捜してみる。

やはり、いない。

「海人、ここじゃ。どうやら無事だったようじゃな」

驚いたことに、ランスゥは俺の頭上から降りて来た。

「ランスゥ、驚かさないでくれよ」

「すまん、すまん。鏡が面倒なところにあったのでな」

そう言うと、１枚の鏡を俺に見せた。

その鏡は、枠は金や銀、宝石などで飾られているが、今までの鏡との違いが一目でわかった。

そう、その鏡には大きなヒビが入っていたからである。

「海人、わかったようじゃな。この世界は滅びの一歩手前にある。バルディの奴が本格的に動き出したようじゃ」

バルディが・・・桜ちゃんを助けなければならない。

「海人、直ちにこの世界に行くのじゃ。迷う暇はないぞ」

ランスゥが俺を焦らせる。

そうだ。

俺はランスゥに言わなければならないことがあった。

「ランスゥ、俺はどうやら魔法が使える。白の魔法使いらしい。バルディが俺の対となる黒の魔法使いというのは初めて知ったよ」

ランスゥは落ち着いている。

「海人、ではその魔法を使ってみよ」

「わかった。今、宙に浮いてみるから」

俺は・・・。

???。

おかしい。

魔力が働かない。

体が軽く、宙に浮くイメージをしてもダメだ。

「海人、どうした？」

俺にもわからない。

つい先ほどには、光のような速さで空を飛べたのに・・・。

今はそのカケラもない。

「ランスゥ、バルディの誕生した世界では俺は空を自由に飛べた。しかし、ここではその力が発揮出来ない。どういうことなんだ？」

「海人、これがワシがお前さんに内緒にしておいたことじゃ。バルディは、その世界の全ての人間が魔法を使える世界で誕生した。お前さんは違う。しかし、焦るではないぞ。その力は、今は眠っているだけじゃと思う。本当に必要になる時には覚醒することになるというのがワシの推測じゃ。しかし、これには根拠がない」

「海人、ワシがおる。魔法に頼らずとも大丈夫じゃ」

ナナカミだ。

そうだ。

俺には、ナナカミがいる。

恐れることはない。

「ランスゥ、俺は行くよ。バルディを倒し、桜ちゃんを助け出さな

いといけないからね」

「そうじゃ、迷うな、海人。迷いが隙を作る」

ランスゥとナナカミが同時に声をかけてくれた。

「じゃあ、行くよ」

俺は鏡に意識を集中させた。

ヒビの入った鏡は表面に不規則な波紋を見せる。

「行って来る」

そう言って、鏡の中へ入った。

ランスゥの声が遠くから聞こえて来た。

「海人、頼んだぞ。滅びが近い。お前さんが頼りじゃ・・・」

第３７話

ガツ、ガツ、ガツ、ガツ・・・。

軍隊の軍靴の音が響く。

「海人さん、お願いします。我々、レジスタンスのリーダーになって下さい」

そう言ったのは４０代くらいの男だ。

名をダラスと名乗ったのを覚えている。

ここは・・・下水道にある隠し部屋。

レジスタンスの秘密の部屋だ。

聞いた話では、レジスタンスは国中に散らばっているとのことだった。

そもそも、俺が今ここにいるのには理由があった。

鏡から出たところ・・・それは図書館。

俺の世界で呼ばれる図書館だった。

後から聞いた話だが、その図書館はこの世界で一番の蔵書を誇るということだった。

その図書館には２つの種類の人間がいた。

正確には、今、俺がいるレジスタンス側の人間と政府、軍事政権の人間である。

レジスタンスたちは、皆、手錠をはめられ、壁に押し付けられるように立たされていた。

その中に俺は鏡から出て来た。

驚いたのは政府軍の兵士たちである。

それは俺も同じだ。

政府軍の兵士、約２０名が俺に俺の世界にある銃を俺に向け、今まさに発砲をしようとしていたからだ。

「海人、ワシに気を送れ」

ナナカミの声で我に返り、俺はナナカミに気を送った。

その時である。

１人の若い兵士が緊張に我慢出来ずに発砲した。

俺はナナカミを円を描くように振った。

１人の発砲が全員に移り、政府軍の兵士全員の銃弾が俺を襲った。

しかし、その銃弾が俺に当たることはなかった。

ナナカミを円を描くように振ったことで、気の膜みたいなものが出来ていたからだ。

銃弾は俺の目の前で止まり、ポロポロと床に落ちた。

兵士たちの発砲が止まる。

どうやら、弾切れのようである。

俺は兵士たちをナナカミで気絶させ、少し迷ったが壁際にいるレジスタンスたちの手錠をナナカミで断ち切った。

手錠は勿論、金属で出来ている。

その中にダラスがいた。

ダラスたちは、俺の技を見て、レジスタンスに加入して欲しいと、リーダーになって欲しいとのことだった。

状況がイマイチわからないので、この世界の様子をダラスに聞いてみることにした。

いや、ダラスの方から話してくれたのである。

「先ほどは危ないところを助けていただき、ありがとうございました。この国、いや、この世界は、今、破滅の危機に立たされています。少し長くなりますが、お聞き下さい。まだ名前をお聞きしていませんでしたね。私はダラスと申します。この地区の責任者として、現在、政府軍と戦っています」

「海人と言います。俺はある理由があり、この世界に来ました。信じてもらえるかわかりませんが、俺はこの世界の住人ではありません」

「海人さん、不思議な力をお持ちのようですね。どうか、我々に力をお貸し下さい」

それが、ダラスたちとの出会いであった。

そして、この世界がある人物の登場により、破滅へと進んでいることを知ることになったのである。

ダラスはそれを俺に話してくれた。

第３８話

「今から3日前のことです。黒い衣装を纏った謎の集団が我が国に突如現れました。その数、約２００００人。リーダーを名乗る男は自らをバルディと名乗り、この世界を統治すると宣言しました」

やはり、バルディはこの世界にいた。

「我が国、そして、この世界がバルディと名乗る男の軍団に征服されるのに時間はかかりませんでした。2日です。たったの2日で私たちの世界は・・・」

ダラスの沈痛な言葉が俺に届いた。

俺はダラスにバルディを倒すためにこの世界に来たことを伝えた。

そして、ダラスが俺に提案してきたのである。

レジスタンスのリーダーになってくれと。

俺の力がバルディの軍団に対抗出来る最後の鍵だとも言われた。

しかし、バルディの軍団は約２００００人。

一筋縄ではいきそうにない。

「ダラスさん、ここ以外にもレジスタンスがいると言いましたね？。まず、全員で情報を共有し、団結する必要があります。俺1人の力では、２００００人の相手をするのは無理だと思います」

ダラスが壁に貼られた地図をテーブルに並べた。
この世界は文明が発達しているのであろう。
地図は俺の世界と同じ球を現す地図になっていた。
「我われの国はここです」
指を指した場所は地図では一番大きな大陸だった。
「海人さん、私たちの世界の中心は我われの国が秩序を守って来ました。それ故に、軍事力が世界一でした。しかし、その力を発揮したのは５０年以上昔のことです。今は平和な世界なのです」
ここで一つの疑問が俺に浮かぶ。
バルディの軍団が現れた時に対処出来なかったのだろうか。
これから先のためにダラスに聞いてみる。
「ダラスさん、バルディの軍団は２０００００人でしたね。この世界にはもっと多くの軍隊がありそうなのですが、対処出来なかったのですか」
ダラスは少しうつむき、ことの真相を俺に話してくれた。
「バルディと名乗る軍団は、この国の軍隊をどういった力を使ったのかわかりませんが、自分の操り人形のようにしてしまったのです。先ほど我われを捕らえていたのは、我われの元同朋です」

バルディはきっと魔法を使ったのだろう。

「海人さん、あなたの使った不思議な力はバルディに通じるものがあると見ました。それ故に、あなたに我われレジスタンスのリーダーをお願いしたのです」

バルディは近いのだろうか。

「ダラスさん、俺の考えではバルディを倒せば、またこの世界は平和になると思います。バルディはどこにいるのですか?。それと俺1人ではバルディにたどり着きそうにありません。情報を下さい。それから作戦を決めましょう。俺はバルディを倒すためにこの世界に来たのですから」

ダラスは新しい地図をテーブルに並べた。

「これがこの国の地図と下水道の地図です。我われレジスタンスはこのオレンジの位置にあります。レジスタンスの数は約１０００人。皆、バルディの軍団に捕らわれてしまいました。バルディの軍団２００００人と元我われの軍隊を併せると約１２００００人になります。私には良い考えが思いつきません」

１２００００人だって?。

それに対し、レジスタンスは約１０００人。

「ダラスさん、良く聞いて下さい」

俺にある考えが浮かんだ。

第３９話

ピンと張り詰めた空気が部屋に充満している。

事は重大だ。

「ダラスさん、バルディの居場所がわかりますか?。バルディを倒せばこの状況は解決出来ると思います」

ダラスの指が地図の中心より、やや上を指した。

「たぶん、ここでしょう。ここはこの国の中心となる建物が集まっています。バルディは・・・たぶんここです。この国の政治を行う「スライセンター」があります。スライセンターからはこの国だけではなく、世界中の様子を監視することが出来ます。この国の衛星軌道上にある、監視衛星兼軍事衛星でこの世界の秩序を保っています。7基あり、いつからついたのか「7輪の首飾り」と呼ばれている衛星です」

衛星だって?。

この世界はここまで文明が発達しているのか。

少しの驚きが俺を襲った。

しかし、ここで歩みを止めてはいけない。

俺はダラスにある提案をした。

「ダラスさん、バルディの軍団とこの国の軍隊はバルディの魔力により操られていると思います。バルディです。バルディさえ倒せば、この世界に秩序と平和が戻って来るはずです。俺の提案はこれです」

俺はこの国に散らばっているレジスタンスの配置に注目した。

「軍隊を動かしましょう。バルディのいるスライセンターまでの道を空けるのです。この地図を見るとレジスタンスはスライセンターを囲むように配置されていますね。レジスタンスの皆さんには、軍隊を動かすためにちょっとした暴動を起こしてもらいます。軍隊は征伐に来るでしょう。その間に俺はこの下水道を使い、スライセンターの前にあるこの下水道の出口から進入します。レジスタンスの皆さんには、軍隊が動いたらすぐに逃げてもらいます。それと一番大切なことがあります。暴動は同時刻に行わなければなりません。レジスタンスの皆さんには連絡は取れるのでしょうか？」

ダラスが自慢げにある装置を指差した。

「これで全てのレジスタンスのメンバーと連絡が取れます。原始的な装置と暗号化により、情報が漏れることはありません」

無線機らしきものが見える。

どうやら、モールス信号で連絡を取るつもりのようだ。

「海人さん、時を急ぎます。今夜決行でもよろしいでしょうか」

俺も同じである。

ダラスの提案に乗ることにした。

「では、今夜、今から3時間後になりますが、メンバーに動いてもらいます。少しお待ち下さい」

ダラスはそう言うと、無線機でモールス信号らしきものを打ち始めた。

「終わりました。海人さん、時間までお食事でもいかがですか？」

そうだった。

俺は時空の鏡に入ってから、一切食事をしていない。

ダラスに言われ、急に食欲が湧いてきた。

「助かります」

そう言うと、ダラスがスープの入った器とパン、チーズらしきものを持って来てくれた。

「どうぞこちらをお召し上がり下さい。戦時下故に、豪華とは行きませんが」

「ありがとうございます」

俺はダラスから食事を受け取ると、久しぶりの食事を取った。

食べながら考えた。

バルディはいるのであろうか。

そして、作戦は上手く行くのか。

俺には3時間が無限のように感じられた。

「海人さん、時間です。私が途中までご案内します」

俺はダラスの言葉を聞き、決意を固めた。

第４０話

下水道の秘密部屋を出る。

ここから先は迷路のような下水道が続いている。

俺にはダラスの提案が非常にありがたかった。

「海人さん、３０分くらい歩けば、スライセンターの前へ着くと思います。私に出来るのがそれだけで申しわけありません」

「ダラスさん、バルディを倒すのは俺の宿命です。俺がお礼を言いたいくらいです」

スライセンターの前に行くまでにことの経緯をダラスに話した。

「そうでしたか。海人さんは私より更に辛い宿命を背負ってしまったのですね。私に出来ることは、海人さんがバルディを倒し、大切な人を取り戻せることを・・・祈るだけです」

「ありがとうございます」

その声に頭上の騒音が重なった。

どうやら、軍隊が動き作戦は成功しているらしい。

「ダラスさん、どうやら作戦は成功しているみたいですね」

「我われ、レジスタンスの結束は固いです。皆、この世界をバルデ

ィから取り戻す決意を秘めています」

真剣に答えた、ダラスが前方を指差す。

「もうすぐです。あ、見えて来ましたね。あのハシゴを登ればスライセンターの前に出ることが出来ます」

目を凝らして良く見てみる。

確かにハシゴらしきものが見えてきた。

いよいよだ。

そのハシゴは、今、俺の目の前にある。

「ダラスさん、色々お世話になりました。ここから先は俺1人で行きます」

「私にも力があれば良かったのですが、海人さん、申しわけありません。成功をお祈りします」

俺は決意を固め、ハシゴに手をかけ、1段ずつ登り始めた。

ハシゴの最上段に着くと、マンホールの蓋らしきものが見えた。

開けようと手にすると、ずしりとした重みが手に伝わった。

慎重に蓋を押し上げ、少しずらしてみる。

大丈夫だ。

自分が通れるまでに蓋を開けた。
地上に上がり、様子を見てみる。
！！！。
静か過ぎる。
街は時間が止まっているかのような静けさを見せている。
その時である。
「出て来たな。ドブネズミが！」
その声を合図にしたのか、黒い衣装を纏った軍団が俺を取り囲んだ。
その数は・・・。
多過ぎる。
もしかして、バルディの軍団全てがいるのかと思った。
建物・・・スライセンターであろうその前に奴がいた。
バルディである。
「こんな子供だましがワシに通じると思ったか！。今、動いておるのはこの国の軍隊じゃ。ワシの軍団は、ほれ、お前を囲んでおるわ」

読まれていた?。

バルディは俺から５０ｍくらい先にいる。

「海人、突っ込むぞ。奴は今油断をしておる」

ナナカミの言う通りだ。

俺は意を決し、決死の突入の決意を固めた。

第４１話

その時である。

２００００人と言われるバルディの軍団が動いた。

いや、動いたというのは今回は当てはまらない。

正確には、俺の目の前で重なり始めたのである。

俺はこの意外な展開でバルディを見失っていた。

軍団は次々に重なり、今は１体・・・１人となった。

そして、それは俺の姿を映した。

「バルディ様、こいつがバルディ様の対となる男なのですか?。まだ子供のように見えますが」

「シャフトよ、油断するではない。奴は既にオーベルを倒しておる。ワシがこの無限に広がる世界で、唯一認める敵。そう、宿敵じゃ。奴がおる限り、ワシの野望は叶うまい」

「失礼いたしました。俺とオーベルとの違いはバルディ様もわかって下さいますね。今回のこの世界の征服に俺を選んで下さったのは、俺の実力を知ってのことだと思います」

シャフトと呼ばれる「俺」がバルディと会話している。

何という不思議で不愉快な気分なのだろう。

「小僧、種を明かしてやろう。このシャフトは、２００００の分身を持っておる。それが本来の１体になればどうなるかわかるか？。その力、姿を映した者の２００００倍となろう」

２００００倍？。

俺の力の２００００倍だって？。

俺はそれと戦わなくてはならないのか。

「シャフト、ワシはこの球に魔法をかけておく。ワシが去っても、この世界はワシらのものだ。次の手を打たなくてはならん。ここは任せる。先に行くぞ」

「かしこまりました。こいつの相手は俺１人で十分過ぎます。バルディ様もご存知ですね」

「よろしい」

パチン！。

バルディが指を鳴らすと、バルディはその場から姿を消した。

「おい！、お前の相手はこの俺だ。１０秒だ。それで決着をつけてやる」

「海人、お前は１人ではない。ワシがおる。２対２００００か。丁度良い数じゃ。恐れることはない。所詮、相手は人まねじゃ。数で

負けるような戦いはすまいぞ」
ナナカミの声で我に返った。
そうだ。
俺は1人ではない。
ナナカミがいる。
負けられない。
桜ちゃんを助け出さなければならない。
「ナナカミ、行くよ」
「おう、任せておけ」
その時である。
どうやら、シャフトが俺とナナカミの会話を聞いていたようだ。
「ほう、面白いものを持っているな」
そう言い、剣を抜いた。
その剣はナナカミとは違い、真っ黒な色をしていた。
「おい、お前話せるんだろ。話してみせろよ」

シャフトが剣に話しかけている。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした?。俺はお前のご主人様だぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「ちっ、使えねえなぁ。まあいい。これであの小僧の心臓を一突きにしてやる」

シャフトが戦闘態勢に入る。

俺とナナカミも戦闘態勢に入った。

第４２話

最初の衝撃で５０ｍくらい吹っ飛ばされた。

俺にはシャフトの姿が見えなかった。

どうやら、ナナカミに助けられたようである。

「ほう、俺の攻撃を受けることが出来るとは思わなかったぞ」

手がジンジンと痺れている。

ズシーン！。

次の衝撃でも５０ｍくらい吹っ飛ばされた。

「海人、お前の武器は何だ！。その強い心がお前の武器ではないのか。集中してワシに気を送れ！」

ナナカミの言葉で我に返り集中する。

そして、ナナカミに気を送った。

ズシーン！。

３激目である。

シャフトの攻撃を受け止めることが出来た。

パリン！。

それはシャフトの剣が砕け散った音であった。

「本当に使えねえな。素手で十分だ」

「シャフト、お前の宣言した１０秒はもう過ぎてしまったぞ。俺を倒すのではなかったのか」

「チッ、口だけは達者なようだな」

シャフトの数が分裂して行く。

２体、５体、・・・２０体、どんどん増える。

増える際限はないのであろうか。

それとも、２００００体にまで分身するつもりなのか。

「海人、良く見てみろ！。シャフトは１体のみじゃ。増えて見えるのは高速で移動しているからじゃ。心で感じろ。神経を集中させろ」

その時である。

俺の手にある、ナナカミに変化が起きた。

以前は剣のようだったが、今のナナカミは・・・そう、日本刀。

しかも、長刀のように変化した。

「海人よ、良くやった。ワシをここまで使いこなせたのは、お前が初めてじゃ。ワシは使い手により、その心の強さにより戦う力を得る。海人、今のワシのこの姿が本来のワシの姿じゃ。もう、シャフトの姿は見えておろうな」

「見える！」

シュッ！。

シャフトが移動する。

シュッ！。

シュッ！。

シュッ！。

シュッ！。

シャフトの動きが止まった。

「なぜだ。小僧、俺はお前の２００００倍のスピードで動いているのだぞ。そのお前が俺について来れるとはどういうことだ！」

シャフトの表情に明らかな焦りの色が見える。

「シャフト、俺は１人ではない。ナナカミもいる。お前はただの人まねだ」

ナナカミが間に入る。

「お前は海人の成長を計算に入れておらんかったようじゃな。ワシが真の姿にカタチを変えれたのは、海人の成長を意味しておる。それがわからぬとは愚かな奴じゃ」

「それなら、これはどうだ」

シャフトが宣言すると俺の分身・・・シャフトが１００体くらいに分裂した。

「愚かな奴じゃ。数が多ければ良いものではない。自分の力を分散するとは、真に愚かな奴じゃ。海人、勝負はもうついた。奴を倒して、この世界を早くバルディの手から取り戻そうぞ」

分裂したシャフトが同時に襲い掛かってくる。

これを見れた人がいたら驚くであろう。

俺の動きが舞踏のように踊るような動きで、シャフトの分身を次々に倒していたからだ。

そして、残り1体。

「これで終わりだ。覚悟！」

第４３話

残り１体になって、シャフトの様子が変わった。

正確に言うと、新たにその姿を変えたのである。

それは、１ｍくらいのガマガエルであった。

「グゲ、オマエゴトキニ、ヤラレルトハ、バルディサマニナントオワビヲシタライイノカ。シカシ、コノセカイハ、ワレワレノモノダ。オマエゴトキ、バルディサマノアシモトニモオヨバヌ」

「海人、こ奴の言うのは本当のようじゃ。お前がバルディに敵わぬということ以外はな」

「ナナカミ、どういうことなんだ？」

ナナカミは何かを感じているらしい。

「海人、この世界にはバルディの魔力が未だに残っておる。そして、その力の中心は・・・こいつだ。このガマガエルに強い力を感じる。海人、確かバルディは球に魔法をかけておったな。どうやら、こ奴がその球を飲み込んでいるようじゃ」

確かに、バルディは球・・・透明な水晶玉みたいなものに魔法をかけていた。

それが、シャフト・・・このガマガエルの中にあるだって？。

「海人、こ奴の口から手を突っ込み、その球を取り出してみるといい」

「ナ、ナナカミ、何言ってるんだよ。その手には乗らないよ。うっ」

「海人、お前さん、実は・・・カエルが苦手なようじゃな。先程から、頬が引きつっておるし、態度が変じゃ」

バレた?。

俺が唯一苦手とする「カエル」の存在をナナカミに知られてしまった。

「海人、早く球を取り出し、この国を解放せねばならぬ。そして、こ奴をロケットに封じることを忘れるではないぞ」

どうやら、ナナカミは俺の弱点を知り、楽しんでいるようだ。

「ナナカミ、球はこのままナナカミで打ち砕くことにするよ。ロケットへの封印は・・・ナナカミがやってくれないかい?」

「情けない。一まず、球を打ち砕くのは手伝ってやろう。しかし、ロケットへの封印は、海人、お前さんにしか出来ぬぞ。手じゃ。素手でこ奴を封じるのじゃ」

ナナカミは完全に楽しんでいる。

俺はナナカミに気を送り、このガマガエルの球があるところ目掛け、思いっきり、斬りつけた。

「グゲェェェェ！」

ガマガエルが絶叫している。

その声と手に伝わった感触が俺の背筋を凍らせた。

ガマガエルの口から球が飛び出し、空中で砕け散る。

「よかろう。次はロケットに封じるのじゃ。素手でな」

くっ！。

「海人、どうした？。顔色が悪いぞ」

意識が集中出来ない。

あのガマガエルを素手で掴むのか？。

「海人、急げ！」

ナナカミが・・・絶対に楽しんでいるであろう声をかけてくる。

仕方ない。

全ては桜ちゃんのためだ。

俺はロケットを開き、意識を集中させた。

出来た！。

ロケットの鏡は波紋を見せている。
ガマガエルの首の辺りを掴む。
「グゲェェ！」
「うっ！」
ガマガエルの鳴き声で集中が切れると思ったが、思いっきりガマガエルを持ち上げ、ロケットの中へ放り込んだ。
「グゲゲゲゲェェ！」
ガマガエルは悲鳴ともとれる鳴き声を発しながら、ロケットに吸い込まれた。
俺は急いでロケットを閉じた。
どうやら、成功したらしい。
「海人さん、災難でしたね。そして、ありがとうございました」
そう言い、俺に話しかけてきたのは、ダラスであった。

第４４話

ダラスはどうやら、スライセンターから出て来たみたいである。

俺の頭に疑問が浮かぶ。

ダラスは俺の疑問を感じたように話し始めた。

「海人さん、スライセンターには緊急用の脱出口が下水道につながっています。私はそこから、スライセンターに侵入しました。しかし、そこは誰もが出入りが出来るものではありません。この国の首相だけに許されています。出入りは、私の目の網膜を認識する装置でドアのロックが解除されます。そして、私はスライセンターに入り、海人さんの戦いを見ていました。見たと言っても、私の目では見えませんでしたがね。この世界を守る、監視衛星を通してでもです」

ダラスはこの国の首相だったんだ。

だから色々とレジスタンスの情報に詳しく、まとめるのが上手かった。

俺は自分の国の首相を思い浮かべた。

俺の国、日本では政治家が私腹を肥やし、選挙のためだけに政治をしていて情けなく思った。

そして、その首相のリーダーシップがなく、政府としての機能を維持し続けられず、国民の支持率も最低なのを思い出す。

しかし、ダラスは違う。

この国、この世界のことを真剣に思い、自らが先頭に立って行動している。

「これで、我われの国、いや、世界は元通り平和と秩序が訪れるでしょう。我われは、海人さんに何かお礼をしなければなりません。海人さん、お望みのものがあれば、どんな要求にもお応え出来ますよ。ご遠慮なくどうぞ」

望みか。

俺の望みは、バルディを倒し、桜ちゃんを助け出すことだ。

この情報が欲しい。

「ダラスさん、バルディの行き先と『桜』という女性を見ませんでしたか？。その女性は俺にとって、かけがえのない大事な人なのです。もし、知っているなら教えて下さい」

ダラスの表情が曇る。

「海人さん、申しわけありません。突然のことでした。バルディの軍団がこの世界に現れたのは。そのため、我われはバルディに関するデータを何一つ知りません。わかっているのは、強大で邪悪な存在だということです」

俺にはダラスの気持ちが何となくわかる気がした。

「ナナカミ、次元の間に戻ろう。この世界は救われた。バルディを追い、次の世界に行かなければならない」

ダラスがこの会話を聞いていた。

「行かれるのですか？。せめてものお礼と思い宴の準備をしようとしていたのですが」

「はい、俺たちには時間がありません。急いでバルディを見付け、倒さないといけません。お気持ちだけ、頂いておきます」

「残念です」

ダラスはそう言い、俺に小さいカプセルのようなものを渡してくれた。

「海人さん、これは我われの世界の技術の結晶となるものです。きっと、海人さんの旅に役立つと思います」

「ありがとうございます」

ダラスに礼を述べ、俺は鏡のある図書館へ向かうことにする。

「海人、使い方を聞かなくて良かったのか？」

ナナカミが声をかけてくれたのだが、当然のことと思われる。

「ナナカミ、ダラスさんがあえて説明をしなかったのだから、必要な時に力を発揮してくれると思うよ」

「そうか。では、行くぞ」

この世界の入口である図書館の前へと戻った。

「ナナカミ、バルディを追って、世界を移動しているけど、バルディには簡単に逃げられてしまう。次元の間でランスゥに相談する必要がありそうだね」

「そうじゃな。ワシもそう思っておった」

「じゃあ、行くよ」

そう言い、鏡に意識を集中させた。

鏡は波紋を浮かべている。

俺は鏡の中へと入った。

次こそ、バルディを倒すことを心に決めて。

第４５話

次元の間に戻って来た。

ランスゥを探さなければ。

・・・いた。

「ランスゥ、この世界をバルディから守ったよ。そして、手下を１人、ロケットに閉じ込めることが出来た」

「わかっておるぞ。良くやったな」

ランスゥはそう言いながら肩を落とした。

どうしたのであろうか。

吉報のはずなのだが、ランスゥの様子が変だ。

ランスゥに聞く前にその答えがわかってしまった。

ランスゥの手を見ると、２つに大きく割れた鏡がある。

俺がダラスのいる世界にいる間に、この世界はバルディに滅ぼされてしまったのであろうか。

「海人、すまなかったな。お前がいない間に、今、ワシの手にある鏡の世界はバルディによって、滅ぼされてしまった。この世界はもう二度と復活することは出来ぬ。悲しいことじゃ」

聞くべきか迷ったが、割れた鏡の世界について聞いてみることにした。

「ランスゥ、バルディはこの次元の間を狙っているんだよね?。その次元の間にある鏡の世界を滅ぼすとは、何を考えているのだろう」

「海人、この割れた鏡の世界は、バルディに不利益とみられたのじゃろう。故に、バルデイは自身の手でこの世界を滅ぼしてしまった」

バルディは鏡から鏡へと自由に移動することが出来る。

このことをランスゥに聞かなければならない。

「ランスゥ、バルディは鏡の移動を自由に出来るけど、これを止めることは出来ないのかな。俺が行った世界では、バルディは簡単に移動することが出来たので逃げられてしまった。これでは、バルディと戦う機会もないよ」

「それはワシも同じじゃ」

ナナカミである。

「ランスゥ、ワシにはおよその予想が出来ているが、それを海人に話してくれぬか」

ランスゥはその長いヒゲを何度も触りながら、迷っているのであろうか、俺に話してくれた。

「海人、薄々、気付いておるのではないか。ワシはそう思うがどう

じゃ」

そうだ。

俺は気づいていた。

気がつかないように、自分に言い聞かせて来た。

「ランスゥ、俺が助け出そうとしている女性・・・桜ちゃんだね」

「そうじゃ。苦しかろう。だが、迷うことはないぞ。桜という娘さんは、バルディに次元移動の力を与えておる。しかも、本人は自分の力に気づいておらぬとワシは考えておる」

やはりそうだった。

バルディに次元移動の力を与えていたのは、桜ちゃんだった。

バルディを倒し、桜ちゃんを助けるという考えは間違っていたのであろうか。

先に桜ちゃんを助け出さなければ、バルディを倒すことは出来ないかもしれない。

どうしたらいいのだ?。

ランスゥが俺の迷いを取り除こうとしてくれた。

「海人、迷わず進むことじゃ。今まで行った世界を旅することによって、得たものがあろう。それが自分の力となり、バルディを倒す

力になるとワシは考えておる」

「海人、ワシも同じ考えじゃ」

声の持ち主はナナカミである。

今は、元の剣の姿に戻っている。

「そうだね。迷っている余裕は俺にはない。止まることも出来ない。進み続け、バルディを倒し、桜ちゃんを助けなければならない」

「良く言った。これぞ、ワシの見込んだ男じゃ」

ランスゥとナナカミが同時に声をかけてくれた。

「海人、次の世界が決まったぞ。バルディはこの世界に移動しておる」

ランスゥはそう言い、一枚の鏡を俺に見せた。

その鏡の額縁は波のような模様・・・そう、海を思わせるものだった。

「ナナカミ、行こう。バルディを追い詰め、倒さなければならない」

「そうじゃな。ワシがおることを忘れるでないぞ」

「わかっているよ」

ナナカミに言葉を返し、俺は鏡に意識を集中させた。

鏡は波紋を浮かべ、俺を映した。

「ランスゥ、行って来る」

そう言い残し、鏡の中へ入った。

第４６話

賑やかな会話が聞こえて来る。

「カメ男（カメオ）、これは何？」

「こちらは、海くらげのスープでございます」

「じゃあ、これは？」

「海くらげのナーゲ和えでございます」

「もう、こんなの食べれるわけないでしょう？」

女性が抗議の声をあげている。

カメ男と呼ばれた亀みたいな男が反論する。

「お嬢様、これは最高級料理でございますぞ。それに私めは『カメ男』ではございません。『ガスキュール』とお呼び下さい」

「カメ男のくせに生意気ね！」

その時である。

何かが落下したかのような地響きが聞こえた。

「バルディ様のお帰りです。お嬢様、どうかお召し上がりを」

ガスキュールは今にも泣きそうである。

「もう、その手には乗らないわよ。いくら私でも、こんなわけのわからないものは食べれないわ」

「ガスキュール、帰ったぞ」

その声と同時に２m近い大男が入って来た。

部屋は天井が高く、大男が１００人入っても余裕がありそうな広さだ。

その中心にテーブルがあり、女性が座って、ガスキュールが食事の用意をしていたところだ。

「バ、バルディ様、お帰りなさいませ。お嬢様は、只今、お食事めにございます」

「ん?、それにしては、食事に手をつけておらぬようじゃな」

バルディはそう言い女性の食事を覗き込んだ。

「ガスキュール、どうらや姫の口には合わぬようじゃ。どれ」

そう言い、皿を取り上げると一口、二口・・・全ての料理を食べてしまった。

「美味いではないか。ガスキュール、ワシの食事より、良いのではないか?」

「滅相もございません。私めはバルディ様のお言葉通り、お嬢様にお食事を用意いたしました」

ガスキュールは完全にうろたえている。

「姫、いや、桜姫。食事を取らぬと体がもたぬ。姫の世界の食事をワシが取り寄せてやろうではないか。何が欲しい？。何でもかまわぬぞ」

桜はどうしたらいいのか迷っているようだ。

確かにバルディの言う通り、食べなくては体がもたない。

「ハンバーガーでいいわ。でも、モスバーガー以外はダメ。それと、アイスコーヒーも欲しいわ」

「よかろう」

バルディがそう言い、指をパチリと鳴らすとテーブルいっぱいのハンバーガーとアイスコーヒーが現れた。

「これでどうじゃ。食べてくれぬとワシも困るぞ」

余程であろうか、お腹が空いていたのか、桜は食べ始めた。

「私一人だと寂しいわ。あなたたちも食べてよ」

「ガスキュール、同席を許すぞ。ワシもこの食べ物に興味がある」

バルディの言葉を聞いたガスキュールが、飛び上がらぬくらいに喜

んでいる。

「ありがとうございます。バルディ様」

「どれ、ワシも食べるとするか」

そう言い、バルディは席に着きハンバーガーを食べ、アイスコーヒーを飲み始めた。

「バルディ様、お嬢様、美味しゅうございます。ガスキュールは幸せにございます」

ガスキュールはそう言いながら、バクバクと食べ、飲み続けている。

「ほう、姫の世界の食べ物は美味いのう。今後は姫の世界の食事を取り寄せることにするか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

桜は考えていた。

バルディのこの力の源は何かと。

桜は考えた。

どうしたら、元の世界に戻れるのかと。

第４７話

日本の〇〇県〇〇市で不思議な出来事が起こっていた。

ニュースがそれを伝えている。

海人の母はじっとそれを見ていた。

テレビ画面には、女性アナウンサーとその現場風景が映っていた。

「こちらは現場です。市内のハンバーガーチェーン店であるモスバーガーで、不思議と言っていいのでしょうか？。それとも窃盗と言っていいのでしょうか。作った、ハンバーガーとアイスコーヒーが突如消えるという事件が起こりました。こちらの店では、ハンバーガーが３０個、アイスコーヒー２０杯が店員の話では、目の前から消えたそうです。しかし、ここだけではありません。１６県、４６市にて同じようなことが起こったとの連絡を受けています。警察は事件性がないと考えて動こうとしません。実に不思議な事件ですね。一まず、マイクを現場からお返しします」

そう言うと、テレビ局の放送ブースに画面が変わった。

男性と女性のアナウンサーが映る。

画面のテロップには、『驚き！、謎のハンバーガー消失事件』と出ている。

アナウンサーの２人が話し始めた。

「不思議なことがあるものですね。これは複数犯による事件なのでしょうか。しかし、なぜ、ハンバーガーとアイスコーヒーなのでしょうね」

海人の母が画面を睨むように見ている。

「そう言えば、海人も桜ちゃんもモスバーガーが好きだったわねぇ。特に桜ちゃんは、1人で5個も食べてしまうくらい好きだったわ。桜ちゃんに『太らないの？』と聞いたことがあるけど、どうやって、あのスリムな体型を維持していられるのかしら」

そして、テレビのチャンネルを変えた。

テレビの画面は、2匹の子猫と1人の男性の姿を映し出した。

そう、CMに入ったのである。

男性が子猫を呼ぶ。

「ゴン太、にゃん太、ご飯だよ」

子猫は「ンニャ」と返事をして男性の用意したキャット・フード目がけて走り出した。

そして、美味しそうにバクバクと食べている。

「まあ、可愛い。やっぱり、猫ちゃんはいいわね。海人とお父さんが帰って来たら、家族会議で決めなくてはね。答えは決まっているのだけど、楽しみだわ」

ＣＭが終わる。

次のニュースが始まった。

今度は若い男性アナウンサーが映った。

「緊急速報です。只今、上空に謎の白い光が現れたようです。局の電話は問い合わせで、パンク状態です。視聴者の皆さん、落ち着いて下さい。これから、首相による緊急番組をお伝えします。それでは、一まず、マイクをスタジオにお返しします」

海人の母親はテレビ画面に釘づけになった。

そして、首相による演説が始まるのを待つことになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6684k/

時空の羽

2011年2月10日23時13分発行